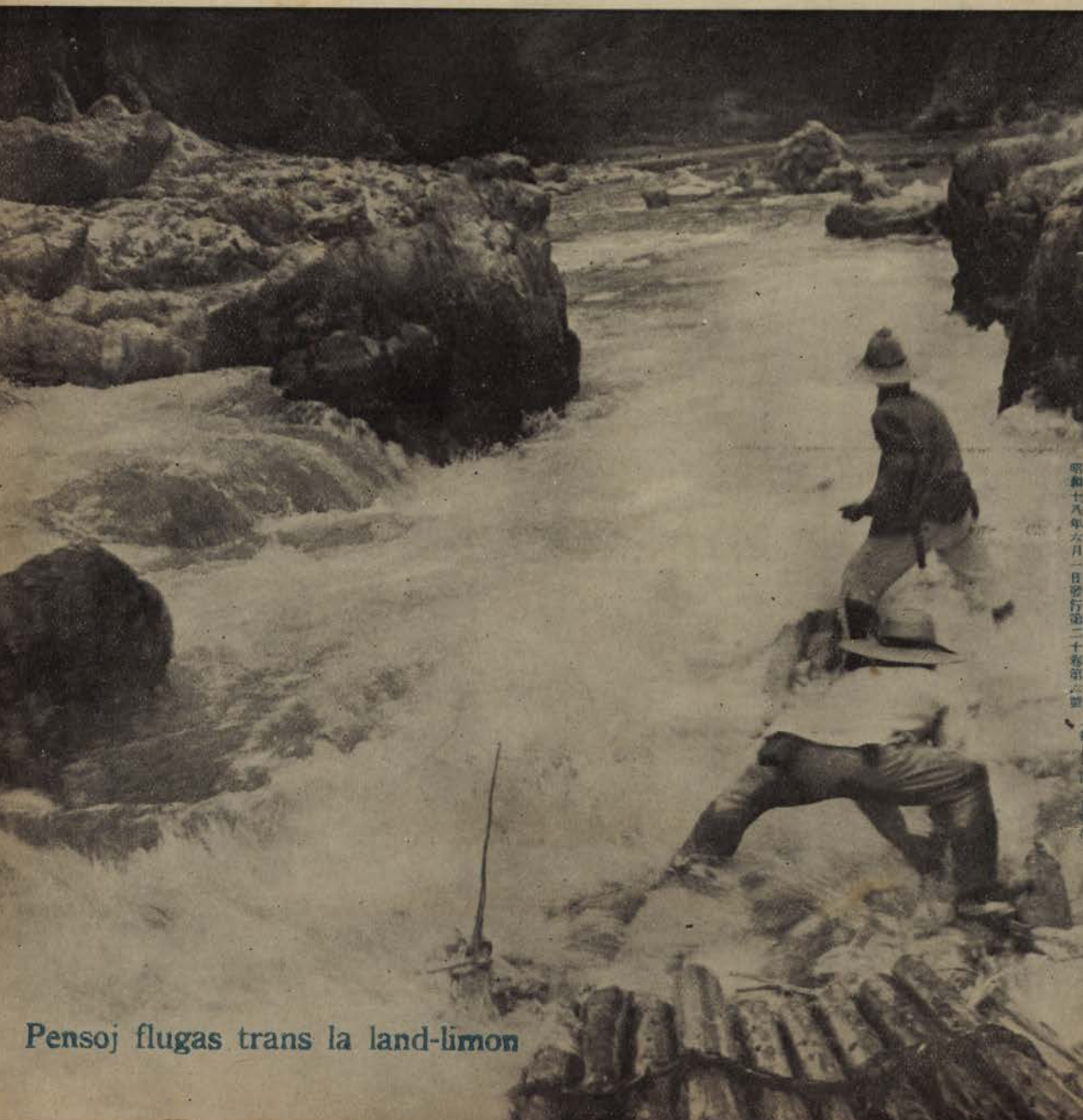


川の雄飛

號月六

宰主★郎路生麻



Pensoj flugas trans la land-limon

健・民・運・動

★生めよ育てよ 皇國の子供
★健康は生む 一億の底力

— 大政翼賛會大阪府支部 —

力威の水顔美 びきにと

の等虫京南・蚊・蚤
! 時いユカで虫毒

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、
殊に小さいお子達のある御家庭などには殊の外重
寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので
大評判の薬です。ニキビや吹出物でお
困りの方に大きな喜びの糧ノ
お勸したい薬です!

阪大・京東

館天順谷桃

敬 弔

謹みて山本元帥の
英靈に哀悼の意を
表す

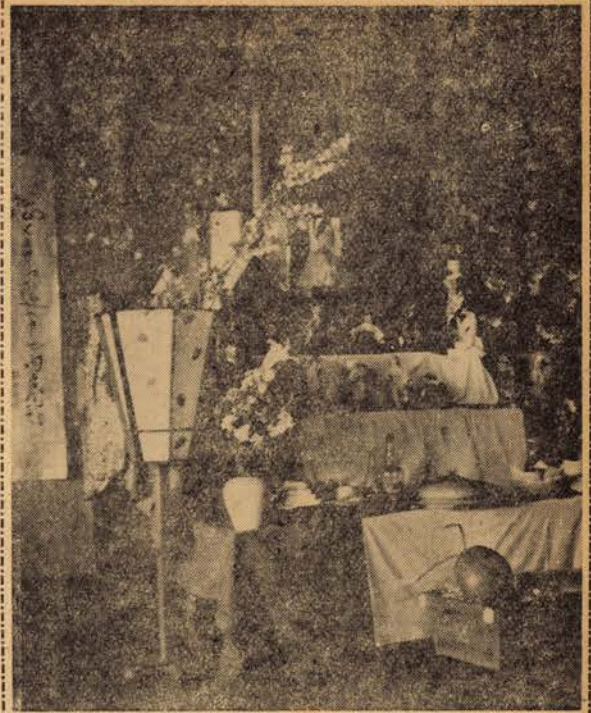
川柳雜誌社
不朽洞會
川柳人協會

國難へ斯う死ぬものと見せ給ひ

麻生路郎

川柳雜誌・六月號目次

表紙(流れと闘ふ).....木下幽王撮影	
動物園書帖.....高翁亮手記.....(二)	
貨幣を集めて.....西川青美.....(四)	
隨丹波の餅を語る.....小山文三.....(六)	
語源覺書(六).....淺田一.....(三)	
武玉川研究(三).....梅本塵山 森東魚 蛭子省二.....(三)	
西貢の雛祭.....小川靜觀堂.....(二)	
軍窓寸言.....安川久留美.....(二)	
川世界史(三).....戸田孤蓬.....(七)	
陣中川柳.....正臣.....(五)	
北支征破回顧斷片.....加川泉泡.....(二)	
先斗町に就て.....島夕紫男.....(八)	
雜記帳.....福田妄夢.....(八)	
信貴生駒吟行.....川柳雜誌園支部.....(六)	
近作柳欄.....麻生路郎選.....(四)	
川柳塔.....麻生路郎選.....(八)	
同舟近詠.....諸家.....(八)	
一慾.....池田可寄選.....(六)	
路都會.....正本水客選.....(六)	
集電話.....奥村丹路選.....(七)	
各地柳壇.....(二〇)	
川柳類題索引.....(三)	
川協・柳界展望.....(二九)	
廻轉椅子.....(二九)	
社關係の人々.....(二四)	



路郎先生！ けふはお珍らしくも
ないとおもひますが私共には意味の
ある西貢へと申しても私の部隊です
が）の雛祭をお目にかけます。これ

西貢の雛祭

小川静観堂

は私の部隊の或る看護婦宿舎でのお祭です。南進の基地に於て傷病將兵の看護介補に寧日ばかりは母の國の國を偲ひつゝ、手作りの雛様を飾りつけたのであります。大體の恰好は寫眞で御想像がつく事とおもひますけれど多少しく説明を加へませう。先づ順序として上段の内裏雛か

ら申上げます。御夫婦のお雛様は少しく御雛様よろしからず、何となく安南人のやうな感じのするものも平素現地人を見馴れた故か否かと笑つた事です。うしろの銀屏は大したものです。内地日本の巻煙草はもはやパライフィン紙で包まれてゐますけれどこちらのものは昔ながらの銀紙です。……五人囃子はまことに目撃目でお雛様に對し御無禮の限りです。然しお手本にする何物もなかつた爲でありませう。その他のものは佛蘭西娘「コンガイ」（安南娘の呼稱）白衣の勇士等々であります。お花は造花も有りますが白、紅、青いろとりん、の熱帯の花を挿しました。菱餅及び數百個の小餅は居留民の或る

征くところお迎へ申せ内裏
雛
此處なれやワンピースに
して雛祭
（五月二日）

動物園書帖

高翁 亮 記手



晩春のある夕。林、寺内、新舊兩天王寺動物園長、大、通江の淨刹、了徳院に迎へ、物不足かちの折柄たゞ心づくしの閑素な精進料理のお齋が供養され、主客の僧俗十數人ひざをまちへて私もそのお相伴にあづかり春宵歡談の過ぐるを惜む。今その中から興味ある二三の話を拾ふてみる事とせん。

動物裁判「狸が貉か」

すぐる哉、動物が係争の因

となり、公の裁判沙汰になつた珍談あり、それは東京上野動物園でのごとで「タヌキかムデナか」の異論が納入者と買手と双方自説を固執してゆづらず、はては林大阪動物園長が證人としてわざ／＼東京まで引ばり出されたことがある。動物學の分類法によると——ムデナは穴熊の種類に屬し、全然狸とは種類を異にするがしかし昔から狸の皮を晒した糝し物はムデナと稱する慣習がある。虎は死して皮を殘し、人は死して名をのこす獲られた狸が革に化けるとそ

の名が變るといふわけ、どちらにも一理あり、双方の面子を立てゝ調定、全く狸らしい愛嬌あるとんだ「笑ひの大岡式の名判決」に終つたといふ。元來、狸といふやつは狡猾な狐とちがつて頗るおどけてゐて微笑しい種をまく、化けるにしてからが餘り實在の人間には化けない。一寸人間ばなれのした怪物——大入道とか一本足の唐傘とか一ツ目小僧とか茂林寺の文福茶釜なんかも有名な童話、そして親切にしてくれた人には恩を忘れないうで、必ずそれに酬ゆる行爲が

伴ふ。可愛い動物だ。かつて天王寺逢坂一心寺の庫裡の椽の下に永らく棲んでをつた古狸が一匹いま現に天王寺動物園で大事に預り飼ひをしてゐる。やうな、このタヌ公、時々姿をくらますので、園丁たちがびつくりさせられるがよく搜すとこれは檻の中の天井裏にそつと隠ん坊、眼ばかりギョロつかせてゐるのである。

僧院の狸話しや春わか

座中の一僧、奇問を發して曰く「世にいふ狸のキンタマ八疊敷とは何に由來するや」と、これにはさすがの動物學者の兩國長も應へられず、たゞ黙して微笑みをおくるのみすると丹波の山寺の住職にして偶々こゝに會しあはせた和尚さん曰く「昔から京の町の間箔屋で箔を樋でトン／＼と打ち伸す臺には必ず狸のふぐりの皮を以てする、一枚の金箔が八疊敷にも伸びるといふ意味、八の敷は八百萬神とか八百屋とか由來多數を表はす日本語特有のもの決して嘘八百ではありますまい」とすこぶるの明答に一座ます／＼和やかさを増してくる。

こゝにおいて、寺内園長、

言葉を挟み「昔から鍛冶屋の用ゆる轡（吹い子）の通風管の轡や同じ器具の上部にある開閉の小窓のフタにもやはりこの狸のふぐりの皮を使つてある、柔くてしかも強いからでせうな」と、遠く古へに遡り石器時代から鉄器時代に遷つた頃、原始的な踏轡（たゝら）は小鹿の内臓物や骨を抜き去て空洞にして吹い子となし皮の伸縮作用でもつて強烈な人工の風を起す工夫をしたものだ。「古語拾遺」なんかに記述されてある。してみると鹿も狸もわれ／＼人類文化の發達に寄與するところ多し感謝報恩／＼如是畜生發菩提心と初めの愚問が却て賢答になり、お坊さんらしい圓やかな話柄になつたのは嬉しい。

京都のライオン脱檻事件

いつだつたか十數年も前のこと京都動物園のライオンが鐵の檻から脱して園内へ跳出したこともあり、當時大阪の新聞號外にまでなつて大きな珍事騒がしがつつた。その園長初め全係員、園丁等は悲壯な決意で獵友會員など非常召集を行ひイザといへば銃殺の用意。しかるに同園長はあくまで沈着、なるべくなら生きものを殺したくないとの心

やりから日頃から飼ひなれた一人の園丁をして生きのまゝの兎の餌に元の檻へ入れやうと誘導せしめたがも一步のところで、園丁が相憎、ゴム靴の足をすべらしツルツと轉んだので、猛獸の方が驚き異様な唸り聲をたてゝ跳びかゝり、あはや危機一瞬、かねて園内お手植の松の木の枝に登つて狙つてをつた射手がパン／＼と連續四十餘發も撃ちこんだから堪らない。ライオンはどツとその場に倒れ、幸ひ人間には被害なきを得た。この大騒動を聞き知つた大阪の林園長すぐに現場にかけつけ京都園長に先づ／＼人間に危害なくしてお仕合せと、慰めや見舞ひの言葉を申述べると京都園長は「いや残念至極、もう少しのことでムザ／＼殺さなくともよかつたものを、しかも彈は二三發でもこと足るものを四十發も放つて可愛さうだ。これから私は黒谷さんにお参りをして死骸を埋めてやり坊さんに回向して貰ふ」と、まるでライオンを自分の愛兒あつかひ。あゝ動物を飼ふほどの者は、これほどの溫い愛情がなければならぬ。當時まだ私は若かつた修養も足らず動物はたゞ畜生としての

み取扱つてをつたが、これ以來、大に教へられ私の心氣も一轉機をなしましたと、林さんの偽らざる懺悔はなし、一座はしばし静寂となつた。

鳴きもせず春の夕べの紅蜜

林園長の話はなほつゞく、すべて獅子とか、虎、豹とかの猛獸に對して人間は決して背を見せてはならぬ。敵に後ろを見せたら最後こちらは敗けだ。對手の面と向つて、じつと睨めつけてゐると、猛獸は人間の背後に自分と同じ、いやそれ以上の大きな何物かゝるるだらふと推察するのかどうか判らぬが、その場合決してこちらへ向つて來ない習性がある。スマトラ、ボルネオあたり南洋の森林で、インドネシア人なんか猛獸が不意に出逢うた時は必ず兩手の指で印を結び、一種の咒文を稱へる、その文句の意味は「われも汝も共に同じ國土に生れた生き物、仲よくしやうぢやないか」といつたやうなものだそう。これは宗教上からくる信仰で人畜相通じ感應する神秘境であらふと。由來泰國でもビルマでも印度でもあちらの舞踊を見ると手の指先をリズムカルの運動さすのが非常に巧妙である。三國傳

來の佛菩薩像がいつれも各種の眞言秘密の結印をしてをられるは成程とうなづかれるわけである。

そこで、親切な林さんは動物園へ來られる人たちにお教へするとして——猛獸類がもし檻の中の奥ふかく隠れ顔を見せず動かない時には見物の方からわざと背を向けて四五歩退くことだ、すると必ずこちら正面に向いてくる。それを狙つて寫眞でも撮るとよろしい、これは多年經驗の秘訣だそう。

なほその夜兩園長から聞いたいふ／＼の話の中には有名な寶塚動物園の象の皮脱疽病事件、これにからまるとても込入つた紛争、須磨遊園地から逃けた虎の行衛、神戸市と動物輸入商との黒狸々の裁判阪神パークのベンギン鳥盜難縞蛇絶食の話、人氣ものリタ嬢の生涯、シヤムから献納の大象とその象使ひ、鶴と鴛鴦との貞操比べ群猿の生活カンガールの特種の骨格等々、興味は容易に盡きない、どうしても記録しをきたい大阪動物園と兒童文化運動もあるが改めて誰れかに書いてもらふこととして、一先づ筆を擱く

(十八年五月五日)

語源覺書

淺田

讀む。ヨムといふコトバは本を讀む外に、歌を詠む、數をよむなどとも働き皆聲を出してする仕事であつたから「呼ぶ」の轉であると思ふ。「呼ぶ」時の「ヨ」を働かした擬聲語であらうが「讀む」も讀む時の聲から來たといふ説は間違つてゐないが段階が違つてゐると思ふ。アイヌ、朝鮮、支那、マライ、泰などのコトバに「ヨム」に似たものがない。歐洲語の「讀む」は希臘語の「レオ」(拾ふ)といふコ

ルジバール

症癩化

中耳炎
扁桃腺炎
敗血症

トバから出て居る。拾ふ時一二つと數をよむからである。又ドイツの昔はブナの木片に字を刻んで神域に撒き、神託を受けるものは其木片を拾つて神意を判讀したといふ。とにかくドイツ語レーゼン「拾ふ」でもあり、「讀む」でもある。子供が大聲で讀む様に昔は聲を出して、讀んだと見える。フオールレーゼン「前で讀む」と譯すべきコトバだが講義のことである。レクチュアも前記羅語から來てゐる。エレクトといふ英語はエが「外」レクトが「拾ふ」で「拾ひ出す」即「選ぶ」である。英語リードの方はドイツ語ラートンと共に人の心を推し測るといふ意味で獨語では「忠言」「獻策」などともなり、「言ひ當てる」「裏切る」「謎」などといふコトバが派生してゐる。

行。行く。松岡 靜雄氏によると生くと同様だといふ。「行く」の方は「生く」と區別する爲にユクとなつたとある。今でもイクで通ずる。行くはユツクリアルクことだとする説もあるが余は松岡氏説を取りたい。アルクは松岡氏によるとボナベ語でアルは「道」といふ。マーシヤル語でも

然り蒙古語「アルフ」ブリヤート語「アルカ」アイヌ「アルバ」は歩くことだから之等の間に系統がある。アユムは松岡氏は「足讀む」で足數をよむことだといふ。泰、マライでは之等日本語に似たコトバがない。ドイツでゲイン、英語でゴーは「行く」であるが日本語と同様ヴァク「行く」といふ風にも使はれる。獨語では「君は如何行つてゐる？」と聞くと「どうです御健康は」といふ意味であり、佛語でも勞働者仲間などでは「サヴ」「行つてゐる？」といへば「如何だい」の意で挨拶になる。さうかと思ふと「ウマイ」「シメ」といった風の所へも「サヴ」といふ。「うま行く」である。所で獨語の「留まる」といふコトバはブライベンで、このライブは英語ライフ、獨語レーベンと同様で生命である。カラダでもある。英語リヴはライフから來てゐるが「生きる」の外に「留る」又は「住む」の意がある。日本の「生きる」は「行く」即積極的なるに反し獨英の「生きる」は「留る」と消極的であるのは甚だ面白い對蹠である。

行くワヨ。今年四月號の婦人公論に柳田國男氏が「知らないワ」と題し、この終のワは我であると説かれたのには「流石」だと感心した。淨瑠璃の文句ならずとも「知らんワイ」「行くワイ」など少し下品なコトバだが屢々聞く。大阪では僕の子供の頃自分のことをワイと云つた。「知らんワイ」は成程「我は知らず」である。梵語では代名詞の人稱が動詞の語尾について其人稱と數とが示されてゐるのを奇妙に感じたものだが、日本語にも俗語には此形があることを教へられて甚だ驚かされ且興味を感じた。「知らないワ」のワはワイのつゞまつたものでワヨと近頃はヨを追加するのが女の少しゾンザイなコトバとなつて來た。大阪で女が「行くシ」などと之を語尾に附して云ふのをよく聞いたが柳田氏の説明を敷衍すると之もワクシ↓ワイシ↓だと考へられる。之も下品なコトバだが「行きヤガレ」などといふのも終のカレは彼であらうか「行きヤ」だけでおけば上品に聞えるのも妙なものだ。柳田氏は長崎邊の「行くバイ」のバイもワイの轉だといはれる。から考へると東

北邊の「行くバイ」のバイも「我」ではなからうか。どうも一人稱に主として使はれてゐる様に思はれる。「ベシ」から來たのでないのかと知れぬ。柳田氏の如き觀察の仕方で見ると俗語の中にも澤山珠玉が残つてゐる。

貨幣を集めて

旅の話(二) 西川 青美

いさゝか大袈裟に聞えるが決して金貨や千圓紙幣を蒐集して居る譯ではない。私の旅行した國々の市場通貨を、ガマロの中から一個づゝ摘み出して封筒に入れておく、一圓、五圓、十圓位の紙幣も一枚づゝ入れておいて持歸つたに過ぎぬ。

今は獨逸に占領されて了つたノールウエー、デンマーク、チエツコ、オーストリア、ベルギー、オランダ等の通貨は昔を偲ぶ記念となつた。おそろくそれらの國々には新らしい嚴めしい獨逸のライヒスマークの紙幣と鑄貨が取つて替つたであらう。舊い鑄貨は鑄潰して軍需品になつてゐる事であらう。

も面白い事の一つである。南方諸國は廿五六年前に旅行した。その時は限られた旅費で命令のまゝに地區から地區へ旅行したサラリーマン時代だつたので貨幣を集めるなど大それた事は夢にも思はなかつた。従つてまだ蒐集してゐない。記憶に残つてゐる事は印度は英國皇帝、ジャバは和蘭女皇の像を鑄てあつた事だ。印度の紙幣がとて大判のもので小さな雑誌を擴けた程の中と丈けがあつたやうだ。コロンボの五セントは正四角形の角に丸味を持たせた銅貨だつた事を憶えてゐる。

香港の一番は日本の五十錢銀貨を五ツも集めた程重く、指を輪にしてもはまらない程大きい。中央を人差し指の上に安定させて縁を叩くと軽い澄んだ音がチーンと長く鳴る。支那人の兩替屋はその銀貨を受取るが早いと臺の上に打ちつけて鳴りを聞いて眞否を定める。人を馬鹿にしたやうなやり口だが先方様は眞面目である。それだけ贋造貨が横行してゐるらしい。

ハルビンから浦鹽へ行く列車の中では啞の勘定をやつた。當時ロシア革命の初期であつてケレンスキー政府の時

だつた。鑄貨の替りに切手を代用してゐた。當時の汽車は石炭の替りに薪木を焚き一日位遅延お構ひなしの時だつた。勿論食堂車はなく、辨當水筒御持参の時代だつた。然し主要驛には交番の立番所位の賣店があつてパンと腸詰を賣つてゐる。それを買ふのにロシヤ語を知らぬ。車中でロシヤ語を聞いて書止めて、店頭に立つた。

さて手帳を開いて言つた。

「ダイテ、ボジャールスタ、フレブ、ス、コルバソイ」

「ダマ」と言つて爺は丸太のやうなパンと庖丁を持つて何事か訊いた。それは全然判らぬ。「パンと腸詰を下さい」とだけしかロシヤ語は判らぬのだ。私は手真似で大きさを示してパンと腸詰を買つた。さて勘定だ。尙更ロシヤ語は判らぬ。發車時刻も迫つた。面例臭いから持つてゐる切手を全部臺の上に竝べて、お代を取つて貰つた。

列車に歸つて寢臺の向側に座つてゐるロシヤのコサツク兵に話した。其男はコーカサスの生れで英語を話せる。先刻のロシヤ語を教へてくれたのも其男だつた。急に仲善しになつて一日を語り暮した。浦鹽へ着く二時間程からほつ

／＼二人は荷造りを始めた。其男は小銭が足りないといつて四十ルーブル紙幣を出したから替へてやつた。翌日浦鹽の日本人店で買物をする時、それが贋札だつた事を教へられた。血の氣の多い時だつたから随分癢に觸つた。日露戦争の仇をこんなケチな事で仕返しをしよつたな等。後から考へると、其男すら何處かで贋札を掴まされたのであらう。本職だつたら百ルーブルの贋札位を出したかも知れぬ。その位當時のロシヤは亂脈だつた。その贋札は今尙大切にアルバムに貼つてある。

エデプトの銀貨銅貨はアラビヤ文字で數字を鑄てあるから、旅行者は大きさを判斷せねば一圓か五十錢か見分けがつかぬ。他の國の貨幣はローマ數字が何處かへ入つてゐるから樂だ。

シリヤの銀貨にはヘルモン山か何かの老樹をシムボルとして鑄出してあつた。

ギリシヤのはギリシヤ文字Pを右左にしたり、上下にしたり、勿論讀めないが、ローマ數字は入つてゐる。外人から見た日本の鑄貨のやうなものだ。

オランダの銀貨は恐ろしく

小さい。そして等價が馬鹿に高い。銀の分量は少しであるが金本位制の國だから對外價値が高い。日本の昔の十錢銀貨位のものが一ギルダ(那貨二圓)だ。

獨逸や佛蘭西には黄銅貨がある。一時日本の十錢に見た事がある。一フランなんか五厘銅貨に間違えさうだ。それでも邦貨十錢の價がある。フランスの紙幣には女神、獨

逸のそれにはヒンデンブルグ元帥の横顔が嚴めしい。

鑛業國スエーデンでは渡し船の切符まで眞鍮の丸札である。5オラと鑄込んであるから、うっかりタバコの時出さうだつた。

鑄貨が無くて紙幣ばかりの國はポルトガルである。印刷美術の國とでも言つてよい程精巧美麗な紙幣だ。大は五百圓から小は一圓まで、その一

圓たるや日本の等價六厘五毛に當る。英貨一磅(十七圓)も兩替しやうものなら小額紙幣だつたら兩のポケットに入り切らなくて片手にも掴まねばならぬ。競馬で儲けたやうな格好だ。便利な筈の紙幣もかうなると厄介だ。レッテル見たいな氣がする。

アフリカ中央のベルギー領コンゴ國の紙幣には鰐だとか、河ボートの繪が印刷して

★陣中川柳

地下足袋でしるす南支の第一歩

正臣作
寧二郎

戦線は何處まで擴がるか
豫測すらゆるさない。

日支事變に於ける南支は
たしかに戦ひの序幕だつた
(略)



ある。

東アフリカのモムバサルは英國同様一シルを通用させて居る。満洲の元と圓とがバーのやうなものである。

弗の國アメリカの紙幣は細中の長手のもので一弗も五弗も大きさが同じであるから、數字をよく見ぬと間違へる。財布も弗の寸法に合はせて賣られてゐる。五十仙は日本の五十錢紙貨に似てゐるが等價は四倍の二圓である。ボチの國アメリカは旅行者には高くつく。

獨逸の銀座ウンターデンリデン街の時計屋の飾棚に一分銀が一個並べてあつた。迷子を發見したやうに喜んで早速五圓なにがしか支拂つて買戻して來た。

印度人の商人が送金する時郵便局を通せば料金が低い、銀行を通せば手数料を取られるから、紙幣を半分に切つて兩端別々に書留郵便で送る。半分に切ると、紙幣ではないから郵便法に抵触せぬ。二個の郵便は二三日後を追つて到着する。番號を合せて裏打ちしてつぎ合はす。

印度で銀行から出した折目のない紙幣を使用すると必ず相手は紙幣の裏へ署名を求め

る。スターでもないのに變な事を求めるなどと思つた。それは責任判なのである。さう言へば百ルービー紙幣の裏にはアラビックや英語のサインが必ずある。最初の使用者の署名だ。でもその責任たるや好い加減なものである。食堂車で百ルービー紙幣を出した時給仕頭がサインを求めた。英字ではあるが日本人の名は讀みにくい、「處は何處か」と聞いたから「日本の大阪だ」といつたら、「いゝからM・B・K・(三井物産會社)」と書いてくれ」と言つた。形式だけの事か、迷信でするのか未だに聞く機會がない。

○ 丹波の餅を語る (七) 小山 文三

由來齒の脱けた老人に硬い御飯を差し上げるのは禁物である。況んや噛み切れない様な皮の厚い大根の澤庵漬の大きなブツ切りや、硬い焼き鰯などを齒ぐきだけで噛む老人に差し上げるのは寧ろ残酷であらう。

筆者の母方の祖父は米壽を過ぎて尙嬰孺だつたが齒は一

本も無かつた。素より昔の田舎に義齒のあらう筈もない。自然硬い食事は攝らなかつたが、それでゐるで蛸と餅とが大好物であつて、これさへ差し上げて置けばツツトも硬いとか堅いとかの小言を言はなかつたし、ほつほつながら良く齒莖だけで噛み切つたものであつた。そして常に「蛸は柔し味増堅し」と言ふ老人の我儘を罵つた丹波の諺を口ずさんで、集ひ寄る孫達を笑はせてゐたのを思ひ出すのである。

○ 丹波の餅を語つて餘程長くなつた。下手の長談義も此邊で止めて、最後に九十一才の長壽を保つた此老祖父から傳へ聞いた昔話を書き列ねて結末をつける事にする。

昔丹波のさる處に嫁いぢめをする慾の深い婆さんがあつた。

此婆さんが娘の嫁入り先から重箱に入れた牡丹餅を買つたのであつた。只さへ好きな牡丹餅。ましてや可愛い我娘の造つた牡丹餅に此婆さんが相好を崩して喜んだのに無理もない。

嫁いぢめの好きな婆さんとて、息子の嫁の手前、一先づそつと戸棚に納ひ込んでしまつたのである。

恰度御晝前、嫁は別室を片づけ始めたので此機をぬすんで、お婆さんは戸棚に倚りかゝりながら重箱の牡丹餅を只一人で囃す様にして二つ三つ摘み喰ひを初めたのであつたが、思へば其日はお婆さんの御寺詣りをする日であつた。

此儘お寺に詣つては留守中嫁が盗み喰ひをするかも知れないのを慮つた御婆さんは、其重箱に残つた牡丹餅に向つて小さな聲で

若し嫁が盗み喰ひする様だつたら直ぐ蛙に化けて呉れ

と、はかない祈願を頼りに勿卒としてお寺へ詣つてしまつたのであつた。

話が代つて留守居の嫁御は此お婆さんの牡丹餅へのさゝやきを良く聞いてゐた。そして留守中に此牡丹餅をミンナ喰べて終つて其代りに重箱の中へ蛙を數匹入れて置いた。

館にまみれた蛙が數匹飛んで出た。

驚ろいたお婆さんは牡丹よ、死ななとあづきが落ちるヨ

嫁ぢやないぞと婆ぢやぞと拍手の調子面白く唄ひ出すと、奥の間の炬燵で休んでゐた若嫁さんが、自分も可笑しくなつて

腹ヨイヨイヨイ~~~~と腹鼓を打つて調子を合せて踊つたと言ふ事である。誠に丹波らしい情緒に富んだ昔話の傑作だと信するものである。

昭和一八一—三二稿

症候體化
錠 錠 錠
アルバジル
錠 20錠 50錠 10錠



柳川

世界史

(XXIV)

戸田孤篷

イエナ・フリートラントの戦

今の英王家即ちハノーバー家の舊地がプロシヤの真中にある。ナポレオンはこのハノーバーをおとりに英と普へ二枚舌をつかひ、今まで中立を守つて呉れたプロシヤを手離す。併し連戦連勝、佛軍の前にはみじめな敗北を喫し屈辱チルシツド條約で免。

しはらくは無言ゲートとナポレオン
佛兵にラインの乙女からかはれ

ワグラムの戦

依然イギリスと張合ふことを断念せぬナポレオン、西班牙をその手先に用ひようとして用ひをこね。スペイン征伐を企て、その留守中明集ねらひが東から来る。踵をかへし猛進、ウイーンに進む。ワグラムの大勝。猪突の藪に中堅親衛隊の少なからざる損害。

不可能征服親兵みな倒れ

ロシア遠征

英吉利はナポレオンに大陸

封鎖。大陸ではナポレオンが逆封鎖を宣言。その足並みはさきにスペインに破られ、今又ロシアに破られんとする。全歐雜軍六十萬をひつさけてモスコへ。その威に服するはずのロシア軍は冬將軍の命するまゝに焦土、ゲリラ兩作戦によつて侵入軍をさんく眼に逢はせ國境外へたゞき出してしまふ。ナポレオンすでに衰運。

焦土戰術供御にもすこし差支へ
退却は地圖も少々ほつて逃

我が敵に狼が居り雪が居り

ライプツヒ、ドレステン、バリの戦

落日の戦、さすがのナポレオンの作戦も穴だらけ。一戦は一戦と押し籠められ。パリは聯合軍の手に、身はエルバ島へ

本城陥落大きな俘虜が一人
出来

エルバ脱出、ワートルローの戦

狂犬を島流しにして平和が

立戻つた様に見えたが、今度は浅間しい内輪もめ、そのすきに乘じてナポレオン再興。燭の滅せんとする寸前のその如く僅か百日にして敗れ、今度は二度と陽の目の見えぬ絶海の孤島コルシカへ直行。謫居してれど火宅をあきらめず

繪草紙の様に全滅してしま

(三三) ナポレオンの外交、政治、家庭

第一回歐洲大同盟

佛蘭西國王ルイ十六世がギロチンに掛けられた。親戚筋のプロシヤ、オーストリアだけの問題ではなく、惡逆フランス撃つべしの聲は全歐にみなが、英宰相ピットの首頭に乘つて四方からフランス國境へ、國論統一の爲ギロチン加速度を加へる。

ギロチンの仇うちたいのも
交り

第二回歐洲大同盟

マラー、ダントン、ロピスビエールなど過激派没落後、生残りの溫和派によつて五人を指揮者とする巨頭政治とほやけ、全歐の侵入軍も有耶無耶に消える。ナポレオンのイタリー征伐はこの復讐。英國への恨みの一矢がつづいてエジプト遠征となる。アブキール灣の勝利でナポレオンの歸路や奪つたイギリスは好機到

來と第二回大同盟へ。九死に一生、エジプトより歸還した敗軍の將ナポレオンに案外人氣のあつたのも之がため第一回統領に選ばれ、アルプスを越へて、目指すは新戰場マレゴ。

御留守番空巢來そつて眠られず

小ビツト

第一回大同盟以來の好敵手であつたのは大ビツトの御曹子小ビツト。マレngoの敗戦後も英國のみは屈せず。ビツトは總力をあけて對敵行爲をつゞけようとしたが國王の保守主義にはまされて、ならず。

一旦職を退き屈辱的アミアン講和となる。

海賊の血を鼻に
みせ頼にみせ

帝王ナポレオン

コルシカの貧乏貴族の二男坊。虹を見て、英を見ない血の氣を革命家の父より、規帳面の中に宿す負けじ膽を母レチ、アからうけついでナポレオン、白眼視された屬國人は昔のこと、今出世双六をのほりつめて帝冠をいたゞく。し

ばらくの偷安片手にナポレオン法典をさしつけ、他の一手を愛妻ジョセフィンに腕へ。戴冠式母の心など忘れ冠のせ方なんか稽古せず

第三回歐洲大同盟

宿敵イギリス打倒を目標に西班牙と組んだまではよかつたが、ビツトは職に復し、大西洋全水域をかげつちまわつてトラファルガーでチヨシ。

海賊の海洋性に及向へず
ジョセフィンとマリ
ア・ルイサ

新大陸に生れ、ギロチンの

川柳塔

路郎選

尼崎奥村丹路

心齋橋の暗さを妻に告げておき
たはむれと言ふ日があつたなつかしさ

巻脚絆これはいゝなと雨の道
みな無事な一日だつた床が敷け

兵庫縣川西市戸倉普天

貨物電車が通り借家が揺れて居る
軍需工場みんな儲かる様思ひ
嘘のない戦果に頭が下ります

兵庫縣西川青美

談古館の茶店(屋島)

平家蟹の足で指さす檀の浦
百石を減した名樹に齡あり

統合はまだ金刀比羅の岡に來す
土佐の宿一ト月早いお膳が出

魚だけはねーと高知は自慢也
海の猛者見護るがごと龍馬建つ

大町桂月の碑
桂月も筆に盡せぬ桂濱

大阪橋本緑雨

新緑の中に杉あり松があり
氏神の祈りは敵を撃つことよ

増産に年寄が目立つ畑也
南國の便りを燕持つて來い

大阪吉田木阿彌

出納簿二つに折つて飯にする
應召は社長の前で肩を張り

大阪徳永雅美

酒と花たがひ違ひに濟んぢまひ
號令を肩へ吸ひ込む女指揮

婦人會部長も噂の中に居り
移轉先昌の事も考へて

百圓の札も知らずに死んで行き
防空へ白髪の見える戰闘帽

ドウリツトル小手をかざして逃けて行き
四一八の眞想

本國へ機首向けてする爆撃か
祝水野君結婚

管制の闇にお琴が鳴つてゐる
モンペイはいいが踵の高い靴

ガンヂーを御覽なさいと書を抜き
カザツクの後ろ姿へ春の風

ハイル宮岡白峯

兵書一冊明日を忘れた友とゐる
軍刀を抜けば動かん目となりし

折靴極秘ですよと預けに來
あの山は櫻も咲いてゐるとやら

消毒器一つ淋しく忘れとき
軍事便御座候でなかりけり

牛乳配達目の目に此の家も子が生れ
昇給をしてもやつぱり喰べてチヨン

艦長の眼鏡へ海鷲みな戻り
初對面から配給の話なり

ほうそうをする一列は許される
戦ひはつゞく入學式の子と

長女麗子は國民學校一年生
松本石曾根民郎

犠牲者ボー・ハルネーの末亡
人ジョセフィン。任陸軍中將
内國軍司令官といふ辭令をう
けたての成上り者にすぎない
ナポレオンに嫁ぐ。内裏の
雄雞様のやうに皇后の冠を頭
にのせるだけのせてみたもの
ゝ、子孫ほしやと云ふナポレ
オンの慾望に勝てず、名門出
身のマリヤ、ルイザにその地
位を譲らされる。

第四回歐洲大同盟

權謀術數といふことがあるが
ナポレオンも此の手をつかひ
そこね、まんまと没落の因を
作る。プロシヤの中部にある
ハノーバーは英王室の出身地
イギリスに内通する不都合を
理由にプロシヤにけしかけて
之を占領させたのも、トラフ
アルガー以來仲違ひをつゞけ
てゐるイギリスにプロシヤか
ら之を取返してやるから和睦
せよと云ひ出したのもナポレ
オン。天科に掛けられた兩國
が憤慨のあまり第四回大同盟
と手を組んで立つ。今迄三回
の大同盟には平和主義の下、
嚴正中立たつたプロシヤを
敵側の陣營に立たす。戰闘に
勝つて戦争に負けたのがイエ
ナ、フリードリントの戦ひだ
つた。

撲殺も出來ずお手々をちと
咬まれ

第五回歐洲大同盟

ハノーバー問題、プロシヤ

強くある子の學ぶ日は来るなり
自分の名讀める机に漆描ふ
窓に背伸びして笑める子は吾が子
てのひらの汗ぬぐふ子のしたり顔

大 阪 正 本 水 客

終點の歌に名高い山が見え
モンペーで母まだ若い歩きやう
再會の日は點字など讀習ひ
居殘薄いたはる如く判を押し

社長室出入はけしい日が續き
白鳥のゐるべきとこにゐる靜か
たゞ口を開くだけが河馬能とみえ
花びらを浮べ靜かに鶴歩く

錦蛇十二單衣といふ動き
ゲートルが賣切といふことになり

縁談へフ、と笑ふ女店員
大學の從兄になつく男の子
犬連れて来るは子のない散歩なり
七回忌親類筋も變つて來

モンペーへ袴惜しけもなくたゝれ
兄弟で金を返へすの返へさぬの
眼帶のまんま櫻の下で讀み
ベツトから櫻のことをたづねられ

大 阪 丸 尾 潮 花
大 阪 中 黒 川 紫 香

應接間教師にお茶を進められ
白粉と言ふを教へたのは貴男
脚線美割箸に似てそつけなし
學位々々シルクハットに似て淋し

神經衰弱の灰へ痾が立ち
でほちんへ縦皺いれて瘦せこける
公用の車窓へ雀の影もよし

大 阪 尾 崎 方 正
大 阪 武 部 香 林

大 阪 武 部 香 林

大 阪 武 部 香 林

大 阪 武 部 香 林

大 阪 武 部 香 林

大 阪 武 部 香 林

大 阪 武 部 香 林

召され行く人が隣に來た夜汽車
歡送へ汽車は大きくカーブする
召され行く人へ故郷は花盛り
理屈など捨てゝこの手を動かさん

長女病む(三句)

おとなしくうなづくだけの子となりし
熱の子を抱き上げて出たバラの花
どの部屋も整然として長女病む

増産日犢ふ母の心意氣
戦友が社長と知れた増産日
大 阪 中 内 翠 芳

瀬戸物のポストも赤くさみだれる
望郷の海にかゝつた虹の橋
君にして似合ふものありヘルメット

表具師のたすきモンペに笑はれる
表情は氷の如きデスマスク
晝休み人の仕事の面白き

雨やどりしばしは藤の棚の下
赤目四十八淵
先頭は若葉の中へ消えてゆき

戦時下に花見の宴は夢だつた
制服で公用らしく門司に着き
移動する度に母から妹から

そのうちに仲善しとなりし遺兒列車
晴國神社臨時大祭
第一高女にて修養園関西大會

先輩の一人交りしペレーボール
琴平にて
弱虫へまだ石段が三四百

若草へごろり繪になる晝寝をし

征服はさらに大きな反ナボレ
オン大同盟を再燃せしむ。ナ
ボレオンはヨーロッパの港
からユニオンジャツクの縮出
をたくらみ所謂大陸封鎖を命
じたが寄り合ひ所帯の悲しさ
同生共死とはゆかず廻れ右續
出。スペインがロシヤが、仕
舞にはスエーデンまで第五回
大同盟に加担して、ナボレオ
ンをエルベへ叩き込む。

ナボレオンその半眼にかこ
まれる
海損が一寸殖えたと云ふだ
けさ

ウイン會議
ホット一息ついで聞いたウ
イン會議。こゝも言挙げ多き
寄合所帯。その最中にナボレ
オンエルベ脱出と來た。最後
の戦を闘ふために立ちどころ
に全歐一致、ウエリントンの
先鋒はワッテルローへ。

ワルツの輪くすして注進御
注進
セントヘレナ
ナボレオン救出の運動も企
てられた。しかし肝心のナボ
レオン不毛の絶海の孤島に病
ひ篤く、只靜かに自傳を口述
せしめながら最後の眠りを待
つ。

母ひとり凱旋の日を待ちた
まひ
番兵もサインブックをもつ
てくる
口述に都合の悪い事も出來
バリ改葬敵も味方も詣りに
來

來

箸を握つて待つたのしみが僕にあり

拾ひ屋と並び立ち讀みした戦果

歸還してお官の砂をなつかしき

醫者として子として父の枕元

足音に迄もお醫者を信じ切り

歸還して日記をつける兄となり

配給所むかしなじみのお辭儀され

無駄はまだこゝにも街の靴磨き

石、瓦花咲爺を想ふ鍼

青い芽赤い芽陽の色限りなし

お膳拭く仲居苦勞のあとが見え

老い給ふ母に濟まない靴みがき

居てほしい人へ夜更の傘を貸し

今日の善、降りる振りして譲る席

再起の日近し左手の筆の牙え

特進級の留守宅見舞ふ慰問列

自爆する背に國運荷負うてる

妻にまかせきれず小兒科に通ひ

猫の足拭いてる伯母の薄化粧

警笛軌道工夫は富士に向き

遅れ毛をチツクで止めて春の街

春すぎて夏來にけらし休閑景

母さんが漢字覺えた慰問文

高架から同じ高さの鯉のほり

披露宴

シヤンパンの音へ響の顔をあけ

リニツク投げ出しやつぱり内がい

川口伊古田伊太古

大阪水谷竹

山口縣長野井

堺村上角

尼崎長谷川三

大坂野元吐

空

次

蛙

莊

鯉轍り今日はあの子の三年忌

還らざる一機の空は殺氣だち

社長滔々時局を論じ廢業を宣す

戦へる街ルンペンの影もなし

校門は營門にまで續いてた

ガツタンゴットン汽車は客などあたまはし

水晶の珠数はつめたいだけだつた

露争にカンニングなどあらばこそ

北支征破

敵將は麻雀ぐるみ俘虜となり

紀三井寺にて

葉櫻に五重の塔はうきだされ

田村君の征途西宮の一夜

征く君とうれし射的にいゝ娘

五月一日社用長崎に向ふ

天主堂つゝじの色に染つて居

決戦下汚れ果てたる戦闘帽ある

ガラガラを振り振り寫眞屋樂でなし

妹もほつゝ詩集よんでゐる

タンポポへ釣竿置いてひるねをし

青い空口笛なりと吹きましよう

貝塚西野一

望

鯉のほりみんな強い子興亜の子

釣れぬのをみんな道具のせいにして

大坂福田妄

夢

十六燭光も亦たのし母と居る

アパートへ女を訪へば越してゐた

子が出來てまた宿がへをするさうな

香具師の蛇動かぬまゝに暮れてゆき

幽

王

泡

泉

川

加

支

★海軍慰問誌獻納

海軍記念日を前に、前線海軍將兵へ不朽の海軍慰問誌を献納

志士諸氏から本誌「海軍慰問誌」を献納された御芳名を左に

麻生路郎(五〇) 高橋源一(五〇)

岩崎柳路(五〇) 中島生々(五〇)

關根山彦(五〇) 川・維花園支部(五〇)

川・維花園支部(三三) 石井白面

人(三〇) 大坂形水(三三) 戸倉

天(二〇) 武部香林(二〇) 吉田

車(二〇) 上田泰光(二〇) 宮田

二(二〇) 乙谷平(二〇) 中村

司(二〇) 井村寒浪(二〇) 川村

勝(二〇) 松浦船(二〇) 高木

勝(二〇) 川・維花園支部(二〇)

庄流よし(一六) 戸田孤蓬(一五)

市電川柳會(二四) 白石柳次(一〇)

奥村丹路(一〇) 西川青美(一〇)

西尾菜(一〇) 北川春集(一〇) 清

水白柳子(一〇) 谷川綠風(一〇)

岡島嶺泉(一〇) 加川泉泡(一〇)

武部若菜女(一〇) 麻生リリ(一〇)

佐伯鶴城(八) 伊古田伊太古(七)

河野夜王(六) 國弘半休(六) 福田

山雨樓(五) 長野文庫(五) 龜井

修(五) 黒川繁香(五) 正木水客(五)

中原鏡人(五) 丸尾潮花(五) 木下

幽王(五) 夷一笑(五) 澤永雅美(五)

川岡風情(五) 川・維花園支部(四)

尾崎方正(五) 八木博坊(四) 山本

花村(三) 山西林笑(三) 松島青洞

(三) 西山紫峰(三) 市場漫食子(二)

水谷竹莊(二) 逸見灯竿(二) 尼

之助(二) 古畑一夢(二) 伊田無

坊(二) 岩本正美(二) 岸田風柳(二)

長山眞星(二) 上田利美(二) 中西

競花(二) 井關嘉美須(二) 山下浩

三(二) 中谷松風(二) 唐津朝美(二)

茶花(二) 九茶(二) 不死鳥(二)

柳花(二) 鉦波(二) 風來坊(二)

姫丸(二) 秀溪(二) 獨樂(二) 秋

子(二) 花美(二) 萬鶴子(二) ひ

さみ(二) 夏子(二)

敬略・括弧内は部数



東窓寸言

安川久留美

東京の浅草浪人してゐた頃
二重結婚で名をあげた金澤生
れの小生夢坊君が著した「富
士を仰ぐ村塾」の中に「高山
彦九郎正之」を政之と字違ひ
であつたのと、日本國民禁酒
同盟から發行した能登羽咋郡
河合谷村の事實小説「故郷の
掟」の中に子爵齋藤實(マコ
ト)を、みゐるとルビしてあ
つたが氣になつて、朱に訂正
してみた、小さなことも知
れぬが、以前私が新聞の校正
をやつた慣しが今尙くせとな
つてゐるものであらう。

女湯に女の子が火のついた
やうに泣く、あの金切聲が頭
に響くと最もイヤな感じがす
る。直ぐにでも湯を飛び出し
たくなる。然し暫く辛抱し浴
槽にうづくまつた時、長女郷
子(本年二十三才)の二三才
頃、よくギヤ／＼火のついで
たやうに泣く子だつたことを
思ひ起す……

北支征破回顧 斷片

(其一)

加川 泉泡

敗兵がまぎれこんでる
夜行軍より

友と途上にあひ、一寸食堂
へ寄る。短冊にみどりの柳と
朱の欄干をかいて「くす餅」
の字が眼につく、一皿注文す
る、三角型に切つたマヅイも
の、
「くす餅はくす餅とかいた方
がいゝね、夏らしい感じがす
る、すの字がいやだ、小島政
二郎といふ人が京都の某る氷
屋に飛込んで「うぢ」を「う
じ」と書いてあつたのに感じ
をわくるくし、直ぐ飛び出した

といふ、藝術家としてさもあ
りなん、日本人は日本人の大
事な假名文字遣ひに周到であ
りたい」
友へこれ文の事を喋舌つ
て食堂を出た、けふの寸學問
である。(五月六日)

ズルズルする。シヤクドウ色
のボーボーと生えた髭面に白
い鹽がふきだして書きそこな
いの臺灣の地圖のやうになつ
て居る。だが元氣一杯でがむ
しやらに目的地に向つて血み
どろの奮戦がつづいてゆく。
ある日の夕暮れ東湖鎮街に入
城した。例に依りて敗兵に荒
された街は目茶目茶で一物も
ない。街の兩側に約二時間餘
りトロリトロリと大休止の體
をやすめて居る折、にけおく
れの敗兵であらう。迫撃砲を
積んだ騾馬一頭、兵士二名、
先頭を(敵曹長)悠々騾馬に
またがりて我々が休んで居る
前を西進する。
後で聞いた話であるが、我
々が入城と同時に東、西門及
び城要點に歩哨をたてるので
あるが、この東門歩哨(京都
出身一等兵)は淡闇を通して
敵兵であると知つて、ワザと

新發賣

消炎鎮痛濕布藥

主治効能 感冒、肺炎、肋膜炎
氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎
ロイマチス、神經痛、打撲痛
捻挫等

今般工キ水ス姉妹品として發賣したる本劑は専らその藥効並に持續時間の永
に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末濕布藥なり
一、本劑は長時間使用出来るやうに工夫してありますから持續時間は任意にし
て支差へありません

包裝

100瓦
500瓦
1000瓦

粉末キ水ス

品妹姉ス水キ工

C-PE19



武玉川研究 (二二)

梅 森 蛭
本 塵 山
東 魚
子 省 二

五 編 (一三)

(207) 口かいやさに葱を落る日

省二 古句「花聲は口がいやさに葱も喰ひ」。「口がいやさ」とは、口悪く云はるる、ひやかさるるの

「花聲」の句の場合と反對とならう

東魚 前説の如くであらう。

塵山 葱は五葦の一でる故、何かの祈願のために、それを神佛に斷つたのである。

(208) せんたくの女の側に暮

省二 一箇の風景。洗濯姿と暮は似て居る。(殊にモンベ着用に於て)

一つは動、一つは靜。

東魚 夏の趣である。確か京傳「繪兄弟」と云ふのがあつたが、その材料になりさうである。

塵山 北齋漫畫の中にでも有りさうで、一寸面白い圖である。

(209) 夕薬師むす子のうその三番雙

東魚 夕方薬師參詣に、ことよせて遊びに出る。三番雙は「始め」の

意味。嘘つき始めのとの意。

塵山 前解通りであるけれども、三番雙としたのは、少し面白くない

省二 朝觀普天薬師で、八日は夕を以て吉時とすと云ふ。「三番雙」はもの事の手始めだ。反對の意の句に「生娘とみえて薬師を朝にする」。

(210) 津の國や浪打際のはれ也

東魚 須磨の浦の敦盛の哀れな最後を、句はして居るのではない。

塵山 一谷合戦の悲劇に相違ない併し敦盛のみで無く、外にも憐れなのが有つた。

省二 「波打際」は、十分に働いて居る。

(211) 辛子酢の引張足らぬ眞裸

省二 初鰹關係句ではなきや。眞裸で味賞する意か。

東魚 眞夏数人の呑仲間が、眞裸での酒宴、辛子酢など暑い折、さつぱりする肴を、われも／＼と所望するのであらう。初鰹の場合ではなさうに思ふ。

塵山 眞裸で初松魚を食ふのは、如何にも江戸ツ子らしくて、小氣味が宜い。

(212) 古あき笠へ瘡かさし込

省二 旅に病む。古瀧笠を敷いて癩に苦しむ。流浪の身。

東魚 落ぶれた門ト附けなども、想はれる。

塵山 昔、習ひ覺えた謠を謳つて門附などした、浪人者かと思はれる

(213) 夕貝かましめに成と夏被

東魚 「ましめに成」とは、氣まぐれの様に、時はづれに咲いたりせぬ意かと思ふ。夕顔が咲くべき時に咲く頃ともなれば、直ぐ御秋きの時期だと、思はれると云ふのであらうか。

塵山 夕顔の花が既に落ちて、漸く實となつたのを、「まじめに成」と云つたので、六月末の光景が表現されてゐる。

省二 夏秋は六月の末である。中七の意を明らかにせぬが、六月は夕顔の咲く季である。夏秋は夕秋とも云ふ。これからも夕顔の季節が結びつく氣がする。

(214) 見抜たやうに六月の傘

東魚 夕立を見越して、傘を用意する。

塵山 傘を持つて外出したのか、少し詞が足らぬ句と思はれる。

省二 傘を用意しての外出である

(215) 毒に成藥にもなる立すかた

省二 美人の立姿、眺むる人の心持では毒にも、藥にも成るであらう

柳川類題索引 (11)

川柳雜誌自一號至二一五號

▼題の配列はすべてABC順、題の下に日本數字は「川柳雜誌」の號數で、算用數字は其の號にある題の發表ページ數、例へば色街四七(24)とあるは第四七號(第四卷十二月號)第二四ページに色街の句のあることを示すのである。

(二) 職業、職名 (2)

I

色街 四七(24)

醫者 一八九(18) 二〇(34)

院長 五七(51)

J

女醫 一八三(17)

女店員 五〇(59) 五(56)

女優 一八三(15)

重役 四九(49) 一七(15)

巡查 三七(8) 五五(54)

女工 四九(59) 一七(49)

女給 一八二(20) 二二(32)

事務員 一七(27)

助産婦 三〇(22)

助手 四〇(34)

給仕 一七五(50) 一四(16)

水屋 一五(53)

東魚Ⅱ毒になる場合が多いので困る。

塵山Ⅱ前説に異議無し。

(216) 飯入の咄か盡て庭へおり

省ⅡⅤにつもる話を語り盡す。

そして庭へ下り四圍を眺めつゝ、氣分を一轉する。又上つてくれれば、話は新たになる。複雑な感情が足されて居る。

東魚Ⅱ庭へ下り立つて、一木一草にも懐しさを、そゝられるであらう趣が想はれる。しみじみとしたよい句である。

塵山Ⅱ飯入の話も俗事に陥らず、やがて庭に下りて、そこ等を見歩く態、情趣に富む句である。

(217) 足輕になる庚申の翌

東魚Ⅱ難解。庚申待をしたので、天へ自身の罪を云ひ付けられる事がなく、濟んだと云ふので、心も足も輕く思れると云ふのか。誠に覺束ない。

塵山Ⅱ庚申待の席上に於いて、他人が立身出世をした話をきき、自分もそれを倣ひて、武士に劣らむとして先づ足輕に住込むとであらう。

省ⅡⅡ庚申の當夜は、寝ると輻をなすと云はれ、語りあかし興する。前解御尤と思ふ。

(218) 乳貰の笠着て袖を笠にきせ

東魚Ⅱ吾が身は笠、小供には袖笠をして、雨の中を乳貰ひに通ふあはれさ。

塵山Ⅱ乳貰に笠、それが雨でも雪

でも、陳腐であると思ふ。

省ⅡⅡ事實かゝる事もあつたであらう。乳貰ひなる詞が、いきなり哀れを誘つてしまふ。

(219) 大病の異見に梶と箸を持

省ⅡⅡ私など年々歳々の體驗である。衰弱しきつては、遂に鉢をなくしてしまふ。榮養を攝らねばと異見しつゝ、薄い粥でも食べさせようとする。

東魚Ⅱ喰べてみる元氣を、出さなくではいけないと、病人を勵ます場合。

塵山Ⅱ昔の人は、食慾の無い患者に、強ひて食を脩めたものである。

(220) うき世繪畫は突出した類

省ⅡⅡ瘦せ氣味な尖つた顔付きを云つたのではなから、其方が浮世繪師らしくもある。

東魚Ⅱ「突き出した顔」は、瘦せた趣が、どうか首肯しかねる。さりとて自分の確説もないが、臆面なしな顔と云ふやうな事かと想像する。

塵山Ⅱ浮世繪師が俳優の似顔など描く時、自然己の顔を前方に突き出して、俳優の身振りをすると云ふのである。

(221) 裏から畫の知れる子おろし

東魚Ⅱ人目を忍むでくる者を對手だから、表は深々と暖簾をかけ、薄暗くひっそり、住んで居る中條流。

塵山Ⅱ表を張る醫師の玄關と違なり、中條流の家では裏口の方が、表

口のやうであつたらう。

省ⅡⅡ「子おろし」と明らかに据えてしまつては、聊か興をそぐが、前句の關係であつたのだらう。

(222) 六に出て六に歸る六あまた

東魚Ⅱ明六つから暮六つまでに、六阿彌陀を巡拜すると云ふだけで、六の字を並べてみせた迄であらう。

塵山Ⅱ例の疊字癖で、何の奇もない句である。

省ⅡⅡ然り、詞の玩弄、勿論疊語法必ずしも排斥は爲し得られぬが、此句は内容が無い。綿谷摩耶火さんの近業「ことばの民俗學」は、此種の研究集大成である。

大阪 松前温泉 名物 本舗 松前屋 出張店 朝日ビル 専門大店 常陸南(八二〇番)

髮結	三(33)	校長	四(57)	記者	一五(16)	門付	一八(20)	苦力	一八(17)	乞食	一五(15)	金魚賣	一五(22)	歌水	一五(27)	紙芝居	一四(19)	家政婦	一四(16)	課長	一九(19)	官吏	一九(22)	靴磨き	二二(33)	肥汲み	二三(31)	喫茶店	二六(62)	カフエー	四(32)	雲助	四(49)	妓生	四(49)	紙屑屋	五(55)	小間物屋	五(52)	小島市	四(68)	口入屋	四(69)	藥屋	四(69)	看護婦	四(54)	小使	六(38)	小商	七(47)	坑夫	二五(58)	會計	一三(43)																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
			二九(35)	一八(18)												二四(35)						一九(22)							一五(43)				二五(27)																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	</

近作柳樽

路郎選

値札見て今度はほんとに手を放し 大阪府 好 郎
 家賃二十さすが鴨居も釘だらけ 同 同
 ストロローを少し吸うては比べ合ひ 同 同
 御危篤か玄關に靴の 亂れやう 同 同
 ラブレター愛と云ふ字は無けれど 同 同
 嫁かぬ氣か此頃自轉車に乗る 稽古 同 同
 簡單に辭める若さのうらやまし 同 同
 日本、租界を支那に還附 同 同
 質草を無償で返す 親心 鳥取縣 悟 志
 木造船廠裏と進水 同 同
 海原を渡る木の香のかぐはしさ 同 同
 決闘下の饗祭 同 同
 青い眼の 人形雛段から 追はれ 同 同
 晴國神社臨時大祭 同 同
 御遺族ですかと番頭 改まり 同 同
 七時半 社長課長も 椅子につき 和歌山 宏 方
 牛のよに馬のよに唯生きるのみ 同 同
 貧乏は 金ですむことに なけき 同 同
 勿體なくお守さんにも油の香 同 同
 リカルテ將軍 同 同
 一萬餘 釘付けにした 速射砲 比叡派遣 喜代松
 比 人 氣 質 同 同
 一ペソの日給一ペソの煙草吸ひ 同 同
 閉店價賣自十二時至十四時 同 同
 昔から 晝二時 間は寝て過し 同 同
 病人を連れて歸郷の荷をまとめ 大阪 秋 子
 親切の押賣りをしてさけすまれ 同 同
 莫ましく散る日の歌を書いて發ち 同 同
 菜の花の 道まつすぐに 靈柩車 西ノ宮 萬龜子
 風に散る 花あり 今宵一と七日 同 同

秋子様令弟病むと聞き

水枕してゝも 波の音がする 東京 同
 働いた泥と踏まれた靴の泥 同 同
 むらさきの匂ひ一つばい 藤娘 同 同
 どの部屋のラヂオア パートまで狭し 同 同
 人生の落目をささるレントゲン 西宮 寒 草
 ハイキング神戸の戀は山へ来る 同 同
 六割のカフェー年増を揃へたり 同 同
 不足税つりの用意もあるらしい 奈良 晶 平
 不足税ういわんわと言うて出 同 同
 不足税切手で出すはなれたもの 同 同
 我が庭にテニスコートの有る暮し 兵庫縣 春 童
 ハイキング女鹿の様な脚をして 同 同
 モンペイの柄も歌劇はそろつて居 同 同
 五人目は襪襪惜しいとも云へず 松江 莞 路
 喫ひかけ消えてしまった大戦果 同 同
 敵性の 人形なれば 捨てませう 同 同
 鶏飼をやつて 行くランドセル 大阪 夏 子
 遺品分け嫁は何んにも手を觸れず 同 同
 土俵 など作り陣中暇があり 同 同
 ただ祖國あるのみ妻も子も穢き 大阪 ひさみ
 み民われ 辨當箱を抱いて出る 同 同
 太陽の下で 男のすずぎもの 同 同
 無細工なモンペ 一番よく動き 大阪 勢 三
 社長をば訪へば畑に出てゐます 同 同
 親切な傘で半分濡れてゆき 同 同
 寫眞撮るだけに社長は歟をとり 貝塚 蓑 笠
 新家庭もう 國債が五六枚 同 同
 友 結 婚 同 同
 花婿は既に御楯となる覺悟 大阪 寒 浪
 共稼ぎ女も云ひたいことを云ひ 同 同
 春の奈良風景 同 同
 案内は美校生徒へ 改たまり 同 同

四月十日入園風景

母親の服装 警戒警報 解除 大阪府 同
 杖となり 柱ともなり 嫁き遅れ 同 同
 泣き止む 欲しい子のゐる借電話 同 同
 轉業で 觀世流へも 無沙汰勝ち 大阪 同
 昨日まで造つた彈を撃ちに征き 同 同
 看板をとると西陽のさす二階 同 同
 米英の汚れを摘み 洗ひする 朝鮮 東 狂子
 生白い 足が畑で 邪魔がられ 同 同
 醉漢の影 殘置燈さらけだし 大阪 利 美
 鷺鷥過河より 同 同
 水鳥の親子ら 船とすれちがひ 大阪 千 斗
 先生と呼ばれて 和平地區にゐる 同 同
 三角の土地を都會で 賣惜しみ 大阪 是 牛
 遠足日 丘は生徒を 撒いたやう 同 同
 請負師に見られる博士と櫻見る 同 同
 一輪のぼたんのそばで手紙書く 津山 蛙 柳
 書いたよな月に喜ぶ子と歩む 大阪 風 情
 モンペの晴着があつてたまる 同 同
 空腹は 又又、人を 追ひ抜けた 同 同
 四月十八日 折々 空を見る 尼崎 治
 地球から抹消すとは土地でなく 同 同
 食つて寝る理想が少し哀れすぎ 朝 鶴 林 葉子
 軍神の一人と 俺は同じ歳 同 同
 軍人に成ると言ふ兒の語尾強し 大阪府 松 緑
 ほんとうは玩具が好きで遊びに来 同 同
 新郎はワキ役ほどで 式が済み 同 同
 茶漬へ出来ぬホテルに来てしまひ 同 同
 茶漬へ出来ぬホテルに来てしまひ 同 同
 その中の一隻 沈む 慌てやう 大阪府 夕 紫男
 征き残り春の夕日が 沁みるなり 同 同
 休閑地アレ／＼ こんなはつ 同 同
 賃 ポート 同 同
 子と乗ればジクザクコース 同 同



久し振り逢へばあんたも軍需工 大阪 浩三
男なら征くぞ南のはての果 大阪 惠美須
せゝらぎは揺がぬ國の音を立て ラツシユアワ都會馴れたモンベ 大阪 朝美
公園の櫻手旗の中で見る 大阪 朝美
チュリツツなどと氣樂な家庭なり 貝塚 多不知
借電話スキの句を背にうけて 貝塚 多不知
お夏清十郎の墓にて
きれいと二人並みくじ引き 丸龜 浪二
職業は焼場人夫で御奉公 大阪 茂路
初夏となる綜を女のセルに見る 大阪 茂路
Bにするランチ小さい聲で言ひ 大阪 茂路
舞臺暗轉金槌の音二つ 臺中 武士
都々逸も米英を撃つ撥の牙へ 臺中 武士
配給へ十圓札の短命さ 尼崎 素香
モンペの別を虚榮を見てしまひ 尼崎 素香
愚かさのまだ階級の中に住み 和歌山 三十木
難産に男の慾は云はずなり 和歌山 三十木
日の丸の大きく映ゆる征日なり 大阪 三郎
貸ボート忘れられてる花の下 大阪 三郎
男の子五人育てた母強し 大阪 照二
買ふ爲の世辭へ吾身を苦笑する 大阪 照二
更生と云うて洋服子に取られ 神戸 小城市
兵の巻脚絆見とれるだけなし 神戸 小城市
始めての都市で車掌へ近く座し 京都 春涉
佛壇を賣るほどはまだ落ぶれず 京都 春涉
偉くなれ強くなれよと鯉幟 兵庫 順三
給侍とかあつて看護婦ツンと生 兵庫 順三
御臨終です平氣で言へる様 東京 青鈴子
生活のすべて單なる私事ならず 東京 青鈴子
雑然と机上散らかし受験生 廣島 榮靜
海峡が見えて祖國の灯がゆらぎ 廣島 榮靜

椰子の實でひよとこに似た顔が出来 廣島 紅多呂
ふるさとの見える峠を部隊過ぎ 廣島 紅多呂
竹ゴマが露營の夢の中で鳴り 同 同
病棟の廊下で靴が氣障に鳴り 大阪 瓜平
櫻散るさまを憶ひつづけを掻き 同 同
壯行會母もいさゝかほんのりし 同 同
もんべいになつて今度は柄を振り 同 同
肺炎が奪つた人を數へて見 大阪 笹路
休閑地いつの間にやら消え居り 同 同
公用が歸つて落す春の泥 瀧洲 久彦
揮をひらくさせて月へ佇ち 横須賀 信常
長男ノ誕生祝
ヨチくと海軍服は餅を踏み 大牟田 須惠夫
吾戀へそれ真心の願なりし 大阪 白路
阿蘇登山
水平線の様なかなたに、外輪山 小倉 泉
故郷はもう腰た頃を歩哨する 大阪 英雄
廿一善の研究讀んで居る 西宮 政重
朝禮の號令遠く襟たゞし 大牟田 逸桂
禿山と何處か似ているヨボの顔 朝鮮 信坊
情熱のじむインキへ嘘書けす 大阪府 奇城
偽はらぬ心で言つてなぜ詫びる 朝鮮 登良兒
斷食の知るや喰ひ氣の恐ろしさ 大阪 佳春
株街へ見果てぬ夢を追つてゐる 貝塚 松樹
これからが俺の驅だ月の道 尼崎 利一
ミシン踏む音へとゞいた軍事便 大阪 風柳
消火彈チリにまみれて國が無事 大阪 松風
不在勝よを行、モンベ出来てから 兵庫 茂
仲人が問へばこの娘も軍需工 六甲 花子
親切な人の言葉の國訛り 大阪 駒志希
モンベ脚絆行く足並も警報下 大阪 三丸
日本の寒さにパーモとてら着る 安東 秋人

勝つ爲の飯神パーク子に聞かせ 西宮 加奈子
村を出て左は木曾路右は京 大阪 三葉
満員車肩から友を見つけ出し 大阪 櫻城
あくびする順番がきた通夜となり 尼崎 光洋
亡姉三回忌
アルバムへ母かはいさう繰返し 大阪府 隆興
教頭の袴は食べる道を知り 大阪 いづみ
警察音楽隊某工場慰問
官服を脱いだ氣持の慰問隊 大阪 實穂
現地自活野菜も作り豆もまき 瀧洲 卜占
ハンチングなんだ刑事と違ふのか 松江 祥月
未亡人華道教授の札をかけ 松江 初恵
再婚をすてゝ親子の二階借り 大阪 しけを
負けたニグロの様とされるだろ 兵庫 葛藤
武士道は天の命する死處を征く 大阪 聖仙
母死後ノ父を想ふ
もの思ふ父へ話題を拾ふ夜々 廣島 雙馬
看護婦の噂は年でけりがつき 大阪府 正起
傷痕章誇らぬ日々の軍需工 名古屋 ひろし
通知簿に子の近眼を知らされる 松山 緑風
着流しは國賊と言ふ眼で見られ 大阪 甚太
おにぎりや爪切草にのぞかれる 尼崎 一馬
一列の先はビールのあるところ 大阪 柳久
がき大將今は海鷲北にあり 神戸 哲水
決戦下製材機の音火の如し 奈良 彌生
火叩きへ女の力あり餘り 瀧洲 しけを
靴直して貰ふ眞上の哨戒機 大阪 研太
をみなてふ心しみる桃の酒 松山 春江
ボーランド借家住ひでうろたゑ 出雲 研路
増産譜中にヒヨコの聲もあり 岡山 鶏城
新道の元は此處らが我が家なり 大阪 青々子
今日からは遺児と呼ぶべきしめる 岡山 鶏子

行吟駒生・山貴信

(上)

—部支園花雜・川—



秋豆・呂悟・雀東(列後) 郎拓・夢妄・彌阿木(列前)

五月晴れの五月二日川・雑花園支部の有志で信貴・生駒へ吟行した。

朝八時半鐘成に、参拜に文字通り押すなの人出である。閑急上六へ、豆秋本阿彌、東雀、悟呂、拓郎、妄夢の六人が落ち合った。六人共ヨイオトナのこと故参園の賑々しい時局下らしいでだちである。信貴山で電車を拾ったのが十時過ぎ、足とりも軽く善男善女に混つて、通俗「信貴さん」で通つてゐる「朝護孫子寺」へ参拜する。この寺は聖徳太子が毘沙門天さんの御加護に對する返禮の意味で建てられたもので、開運福徳きはめてあらたかとされてゐる。

賽銭は少ないけれど汗の金。悪者をかみつさうに「信貴の虎参道」にけがれを拂ふ風が吹き、朱と緑目にしむ信貴の山参道。妄夢

信貴山は太鼓が鳴つて晴れわたる

本堂ではひっきりなしに信者がお賽銭を投げ、拍手を打ちそして祈願してゐる。星軍の武運を、西賢繁昌を、應の成就を、夫婦の圓滿を……

信貴さんへ親をだました錢を投げ

本堂で何を祈るか阿彌陀經

日本晴れ子育地蔵の顔光る

咲き遅れてゐる花に立ち止り

六人の面々もいゝ句の出来まじ様

百圓何某、二百圓何某の信者寄進口

燈を左右に見ながら豆秋氏曰ク「こら

皆儲けよつた人ばかりやな。」東雀

氏曰ク「あゝ一萬圓の口もあるな、

よつぱと儲けてんな。」

休息所で茶を喫し乍ら作句する。



募集句

一路集

慾 可宵選

かりそめの慾が我身にふと迫る
儲かると聞けば峠を越してくる
慾なんぞ知らぬ子供に教へられ
慾ばつた芋の重みにパス通過
子の慾へ頷く父の圓い顔
神様もあきれる程に母祈り
青春の慾ぶつとりと夜業の灯
蠅取りリボン慾なき形にて下り
食慾と別に辨當ゆすり合ひ
配給所私慾を捨てた笑ひ顔
食慾の妻い子供と嬉しがり
強慾を笑へば他人ごとと笑ふ
嫁入りをしてあれこれ慾出来
軍需工慾をはなれた瞳が澄んで
慾のない人と高利貸に云はれ
成績簿親の慾目へ輪をかける
慾とれば淋しい人でありました
教養が無慾のような顔で来る
食慾にまかせて食はず捷でる國
赤實に甘んじ私利私慾を知らず
配給券購買慾をちとそより
一列に並ぶ我慾へ賣り切れる
何時の間意地となつてる慾を知
焼香も済んで遺産をめぐる慾
外出着いまだ食慾満たぬまゝ
遠慮した後で淋しい慾が出る

風情 風柳 眞星 伊太古 綠葉 東狂子 溪路朗 榮靜 翠柳 正起 葛藤 英雄 研路 正美 祇童 青衿子 甚太 惠美須 武士 勢三 守一 しけを 紅多呂 翠雲 養笠 定ひろ

祝日の今日一日を無我無慾
慾のない人に一萬圓あたり
買溜をする程でない慾を持ち
世界地圖小さい慾を喰ふなり
遺言に最後の慾の美しさ
(五)牛の食慾へ富士晴れわたる
(同)慾のないとこまで似てる男の子
(同)慾だけで生き女にした世間
(同)慾でない仲人のモーニング
(同)慾のない奴さ皆んなに怖られ
(人)姑の慾へさからふ日が淋し
(地)繻帯がそでてほち／＼慾を出し
(天)食慾の兵の再起をうたがはず
(軸)いつか読む新刊買つて置く
(同)頼母しい慾と思はず里歸り

都會 水客選

人情を都會の隅で知る不幸
煙突の高さへ都會夕焼る
配給品都會の友を思ひ出し
體格も都會育ちと思はれず
父の見た都會は船のつくところ
田舎から見た程都會派手でなし
増産の村へ都會のロケが来る
食ふ事に行列をする都會也
都會へ来て絶へず財布に錢があり
お祭の様に都會の夜店出る
都會にはビツタリ来る母であり
人を見ただけで都會を思はせる
雑音と騒音都會育て上げ
田舎では食へぬを流石都會なり
都會馴れしからの風邪を引き
立志傳靴に入れて都會へ出

浪二 好郎 秋子 葉光 同 鶏城 詩朗 青紅 研太 青々子 秋子 好郎 世志一 可宵 同 風情 彌生 浪二 定ひち 三葉 東狂子 武士 葛藤 養笠 翠雲 惠美須 眞星 珍柳 伊太古 勢三 寒浪

電話南⑦四四七五・二一八五番

(福田安夢)

同舟近詠

松山前田五健

除隊兵衣料キツプをなつかしみ
伯鶴の洒落咳を入れ取り直し
讀合せ、わざと間違へためされる
煙突を巨砲と見る日の愉快

大槩五箇年忌

あれからの山はそのまゝ、大槩忌

金澤安川久留美

この小指あの拇指の握り飯
煉炭の穴は敵語で一ダース
アンテナは鰯か鮭でも釣る姿
切腹を見て碧眼は眠うなり
春さむし父の威厳に坐らんか
町内の社會部長は碁を囲み
泥のつく土産を渡す臺所

雜記帳

福岡 妄夢

市電の安治川線で「座席ナシ」と云ふ札のかゝつたのに乗せて貰つた。座席を外つして座席のあつた所へ横に取ツ手を付けてある。乗員數も幾分増えた様に思はれるし大變氣持のいいものだ。何處かに空席はないかとウロ／＼する老人の姿も見受けなければ、一人で二人分の席を占有してゐる男も居らない。大體急

兵庫縣岡影町 長崎 柳 秀

闘病は悲し 戦果を聞く斗り
大空へ我れは一人の靴なをし
頭かぬ下戸の言葉の冷た過ぎ
味の素劇薬程の嵩さを入れ

奈良縣 嶋田 翠峯

債券が當つてからの運なりき
轉業は今朝も妻子に見送られ
献納をして有るだけを着つづさん

源北 高峰 柳 兒

スコールへ嬉々と戦塵 拭ふなり

福井縣 村田 眉丈

春宵一刻花代は二十割
呼捨てにする 友情の士官室
警察署署長室ではお茶が出る
一字消し三字追加と法きびし
手を洗ひ父親にだけ 豫後をいふ
本願寺さまも 一臺 献納機

用でない老人や子供連れは、空いた乗物を待つて乗るべきで、私には座る權利が御座います。とウロ／＼するなど舊いアメリカニズムである。この際座席の無い車をどし／＼出せばいい。世界一強い我が日本の國民なら、少々の時間立ん棒でも決して死なない。

○ 昨今、國民服でなければ行けない會合が増えた様な感がある。特に公的な儀禮的な場所へは、國民服を着用して行

かねば恥かしい様にさへ思はれてゐる。之は果して好い考へなのだらうか？さう云ふ會合へ出席するがためにわざわざ國民服一着求める人が多々ある。もと／＼國民服とは便利なものであり、且經濟的なものでなければならぬ。背廣が十分にあるものは、背廣で行けばよい。英靈を迎えるのでも、結婚の式場へでもモ一ニングの所有者は、何も國民服を購入して迄出かける必要はない。大手を振つて背廣

やモ一ニングを利用すればいい。之から新たに服を造る場合國民服とするのならあたりまへであるが、さうでない限り寶の持ち腐れはいけぬ。誤つた國民服是非論は大變迷惑である。

○

近頃の娘さんは大變美しくなつて來た。眞ッ赤な唇をした人も少くなつたし、いやな頭髮も、爪を赤く塗つた人も殆んど見受けられない。所謂あくどいアメトリ好みは街からだん／＼追放されてゐる。そして眞に日本の女性らしい淡泊な化粧になつて來た。戦争のおかげである。

先斗町に就て

島 夕紫男

淺田博士の「語源覺書」は毎號興味深く讀ませて戴いてゐるが、五月號所載文中「點」に關する解説のなかで、京都の先斗町を點即ち葡語ポイントの轉化ではないか（斷定に非ず）とされ例證を擧げて居られる。

ところで私の寡聞によれば此のぽんと町は元來鰻の寢床のやうだ、つまり袋小路であり然も特に細く奥深い町で、

先が行きづまりになつてゐると云ふことを意味するものであるらしい。その證據に古來京都方言として、先の無い出口のない尻無のことを、尻ぽんと稱して居るから、尻無ゆきづまりと云ふ事も合點される。この傳でゆくと大阪の尻無川などさしづめポイント川といふことになる。すると果して昔尻のない人間が居たのか如何か、又、それを何故ポイントと稱するのか、と云ふ事が問題となるが、此點に就ては未だその由來を詳にする知識を持たない。

(卯月下旬某日)

中耳炎 扁桃腺炎 齒槽膿瘍 淋疾

化膿性 症

ルジバル

品製内之山

J 錠

柳界展望

催

▼本社主臨海軍顧問會は五月五日午後御津八幡宮にて開催(前號參照)▼松阪俱樂部藏生路郎川柳講會は二十日十六日午後二時▼大阪警察病院川柳會は四日二十七日午後五時▼有恒俱樂部川柳講會は六日廿四日午後五時▼惺生會事務會は十二日午後二時▼大寶町會事務所跡上にて開催▼大阪選信病院川柳會は十五日午後二時▼尾崎佐友斎翁川柳會は十七日午後七時▼川大柳會は二十五日午後四時▼川・維新支部會は廿六日午後六時半生島町會事務所跡上にて開催何れも路郎主幹出席

▼麻生路郎主幹は十四日午後四時から日東紡績株式會社大阪營業所で、十七日午後四時から蝶理織物株式會



市電柳會大津神社行
時半から府下貝塚の
日本醫藥園千石莊で
川柳の講演をされた
▼石曾根民郎氏（不
朽洞會員）は四月廿
三日から廿九日まで
「軍人接護精神昂揚
運動」が實施された
陸長野縣下各地の傷

「川柳を知るこゝろ」を刊行、白衣の勇士へ贈呈された『掛飛吉宣氏は遙々ジャワから』『こちらの四月はもう第一回の稻刈が終つて、只今二回目の田植をして居ります。暑いですがそれでも元氣一杯』の

軍事便を寄せられた▼久保田可學氏（廣島）は七十四歳の老獃で田園へ増殖の旅をされた▼異名一物氏（不朽洞會員）より「千石莊川柳會は俳句短歌の會より後に出来て、而も斷然多數の會員を得ました」との通信を寄せられた▼樺本綠雨氏（不朽洞會員）は五月上旬法要の爲石川縣へ旅行せられた由▼黒川紫香氏（不朽洞會員）は中旬廣島へ旅行せられた▼石井白面人氏（不朽洞會員）は廿日鹽津省へ出張の爲上京せられた▼戸倉雪天氏（不朽洞委員長）は社用で金澤、新潟、宇奈月方面への旅先から、膳が出てどうぞ御自由にとは淋し」の句信を寄せられた▼横濱の福田山雨樞氏（不朽洞會員）は廿八日燕て全日本科学技術團體聯合會の公務を帯びて來阪、路郎主幹と歌談された大阪に二日滞在▼藤井城東氏（小那）は岡山縣長に▼森重游記氏（小那）は琴歩訪役へ何れも榮轉された▼川柳、雑誌松江支部では二十八日夜祥月、嵯松、泷淵、詠人、糸葉氏等が勝谷山川兒氏を圍みての

花川柳道場では廿七日、海軍記念日、期し成田山へ出征柳友武軍長久祈願吟行をされた▼東京の浅田一博士(費助員)は今度隨筆「法醫斷想」を執筆刊行される由▼金井串郎氏雖大阪新聞紙上に一漫書は思想戦の華だ」を執筆された▼徐州文化協會主催の米英聲滅書畫色紙短冊展は五月十五日から十九日まで徐州公會堂で開催盛況を極めたとのこと▼森東魚氏(北京)は入院中の令息の病癒を願つて案じ五月下旬に豐中の留守宅へ歸宅された。

▼上田翠光氏（不朽漏會員）御祖母
四月廿九日永眠された謹んで悼む

▼臺灣川柳社は臺北市北門町一六へ
▼高山武士氏は臺中市寶町二丁目六
へ▲上田蒙光氏（不朽調査員）は布
施市中小阪三九七東翠園住宅へ▼麻
生路郎師（本社主幹）は自宅を大阪
市住吉區萬代西五丁目二五番地へ

▼前號二二頁三段二六行目「三男孝之君」と訂正

★社の回覧板

▼時局の推移に鑑み、本誌の重要性を痛感し、本社の組織を全面的に層

編輯部新陣容を左の如く改めた。
編輯長須崎友次、副編輯長中原銃人
編輯部員麻生霞乃、夷一笑、木下幽
王、福田安夢。(編輯部會は毎週水

した）。句會部長黒川紫香、副句會部長武部香林、副句會部長丸尾潮花、句會部員宮田不二、松浦帆船、加川泉泡、句會部會は毎月第二水曜日午

後六時から不朽洞で開くこと。其の他の部に就ては目下人選中。

▼来る六月十三日（第日附）に、不朽會主催の下に、喰べられる維
草の吟行會を府下東北郡の景勝の地
で開催、會員の親和と郷民運動の實
を擧げることとした。喰べられる維
草の榮養と醗埋に關しては「草木徒
然」の筆者であり、不朽會會員の重
鎮である西田興樂氏に指導的講演をお
願ひすることとなつてゐる。案内は
近接地會員のみに發送したので諒
承を乞ふ。

▼本社では山本元帥の英霊を慰めるため、「元帥追悼句會」を六月五日夜、御津八幡宮で開催することを發表したところ、期せずして元帥の國葬日と合致した。萬障を排して出席された。

★不料理會員發表

大阪 岸田 風柳氏（潮花氏紹介）
同 井關惠美須氏（同）
同 唐津 朝美氏（同）

★會員吉田木阿彌氏は
星上郎へ推薦

★支部新設
布施支部（幹事は上田翠光氏）

廻轉椅子

★前號「海軍慰問號」は所謂慰問號らしくない慰問號として好評噴々だった。らしい慰問號が親爺の慰問文なら、らしい慰問文であり、慰問號は母親の兄弟の慰問文である、云つてもいいいだう。らしいものをつくることはたやすいが、らしくないもので、慰問の實を擧げることには



迴轉椅子

容易でないからである。あまりに判りきつた大膽果のことはなく、むしろ述べて感謝の言葉を捧げるやうに、他人行儀な記事は一切省いたことも、そうした苦心の結果に外ならなかつたのである。

★本社の慰問給賦納の擧に、心からなる善意を表し、すすんで参加された各位に、紙つ御禮を申上げる。

★本號の表紙は木下幽王氏を煩はした。

★本誌の勝と云ふ維文欄は相變らず賑やかだ。お馴染みの西川青美氏の「貨幣を集めて」はなかなか興趣が深い。高翁亮氏の「動物聞書帖」醫學博士淺田一氏の「語源覺書」の續稿、陸軍軍醫大佐小川靜觀堂氏の「西貢の雜祭」、小山文三氏の「隨筆丹波の餅を語る」等々を何れも好

★古川柳研究の至寶「武玉川研究」及び、戸田孤蓬氏の「柳柳世界史」は本誌の紙價を重からしめる金字塔であることは誰人も認めるところである。

★西田彌太郎の「草木徒然」は本號締切後に着したので次號へ、拙稿「初等川柳講座」を本號へ發表の予定であつたが、記事幅狭のため、これ又次號へ刊登することとした。

★私は四月下旬に引越しを開始し五

の宿替は大陸的たんな」と云はれたと娘がいふ。いかにも漫々的なのにあざれたといふ口吻である。大阪から漢の海岸へ引越す時には四月初旬から八月下旬までかかったが、漢か

からなかつた。それでも宿替を一日にしてしまふ人達から見れば、いかにも漫々的に見えなかも知れない。★編輯部の新陣容が出来上つたのでみんなハリキッてゐる。内からも外からも、一層のペンタツと協力がのこましい。(路郎生)

いのちある句を創れ



投稿清規

▼用紙は原用紙▼文字を正確
▼関係月日及場所記入▼締切は
毎月廿五日▼投稿先は本社宛

川 堺支部句會(堺)

五月廿六日 於出島町内會事務所 角堂報
軍服を着れば小便さでなし 英二
艦のある事も自慢の星ニツ 東 雀
身にあはぬ戎衣も嬉し一ツ星 木阿彌
軍服で黙す征く日の御燈明 一 鳥
軍服の父へこわくよつて行き 波夢造
軍服のまづ階級を眺めたり 同
軍服を脱がして嫁の話する 安 夢
軍服になつても母はちんげし 路 郎
黙禱の後暫らくは無言なり 角 堂
黙禱の背で蝶々が舞つてをり 安 夢
黙禱に遠くの汽笛聞えたり 波夢造
黙禱が清んで大きな息を吐き 同
黙禱に出て来る兄貴笑つて 多賀雄
黙禱の終つた空が澄んでゐた 登志緒
忠靈に吾も續かん黙禱す 實 穂
黙禱の母子へ淡い佛の灯 銚 人
この海に向ふに死闘闘けられ 英 二
七ツの海やがて我等の行く處 實 穂
偉大なり海に夕陽の落ちるころ 登志緒
夕陽落つ海へ大きく石を投げ 安 夢
海の幸山の幸 銚後はまた強し 東 雀
二世紀の腰刀を捨てた榮葉服 昌 坊
増産へいと云はぬ除畫を吹く 一 鳥
増産へ年など云はぬ父であり 安 夢
花も咲け鳥も唱へよ殘業だ 英 二
一杯へネギ・ナス・トマト・イモ其他 銚 人

川 梅田支部句會(大阪)

爆音によく氣の揃ふビルの窓 鮎美報
窓口へ患者の頭がゆがんでゐ 雲 峰
窓硝子曇つて子供病んでゐる 豪 雄
丸窓へうれしく咲いた福壽草 鳴 玉
丸窓へ縁談映る春の宵 三 司
丸窓へ縁談映る春の宵 紀 川
子をあやす顔は窓から覗いてゐ 綠 葉
自轉車も増産戦士の足となり 二 郎
銀輪の日の丸椰子を通りぬけ 茂 郎
満員のホームに目立つ一勇士 フサエ
満員車席をゆづれば拜まれる 喜 弘
寮寮に湯の香流れて人戀し 吾 水
夕食へ今日も安堵の茶の香り 秀 峰
花の香の尼僧の指へまだ残り 由 布
新しき希望大店で本を買ひ 邦 治
大店で日本橋が目立つなり みつ子
おしるこの味に課長と同じ椅子 鮎 美
川 廣島支部句會(廣島)
四月二十四日 於日本棋院支部 久米雄報
一億の合掌神もしろしめし 清 月
汽車の旅寝れを知らぬ子へ疲れ 朱 香
巻紙にあら／＼かしこようつり 獨 笑
巻紙の中に決意の溢れたり 鶏 子
關郷して紹介される兄の嫁 月 浦

川 下關支部句會(下關)

勝つ國の水槽空の色が浮き 半休報
待降露日曜毎に堀り進む 可 榮
防空へ天も協力してか雨 蘇 堂
警報に用具あはてぬとこへ置き 米 三
モンベさへばけは劣へ負けぬ腕 秋無草
顯微鏡今日は學徒としてこもり 十字星
妊娠ときまり内科を出る笑顔 蘇 堂
呼鈴を押せば二燭の灯がともり 米 三
節電へ一集まるいろり堀だ 秋夢草
節電もなく淋しさを散る櫻 利 満
節電に立つて見に行く置時計 可 榮
脱帽の列へ英靈通り過ぎ 市多權
帽子取つて挨拶をする仲でなし 望 水
脱帽の頭を春の風がなげ づる
脱帽で待つ病院車ゆるく行く 鯛好坊
脱帽へ孫のそつと取つてやり 秋無草
縣長と呼ばれて一人だけの驛 百太郎
團體の輪送縣長顔を出し 市多權
急行を通し縣長お茶にする 秋無草
大陸の土となる氣の次男坊 鯛好坊
話では大陸ほろい儲けどこ 秋無草
警報に妻の姿は見直され 精 花
軍神へ父も感謝の帽を取り 井 蛙
節電へ子も復習を畫に決め 同

川 小郡支部句會(山口縣)

四月十五日 於鐵道俱樂部 井蛙報
軍人と答へて遺児の力む願 いさを
遺児を待つ社頭の櫻みな開き 凡 平
遺児の目に軍装みんな父に見え 鯛好坊
入試バネ九段の父へまつ聞かせ 一生
決戦下埃を溜めた飾窓 市多權
奉仕隊だらけを比べ合ひ 百多朗
増産の埃を春の汗にとめ 市多權
打水の立てまいための埃り立て 井 蛙
関兵へ閣下も埃浴びて立ち いさを
地圖壁に掛けて日課の様にみる 市多權
無事歸還團む當會地圖もかけ 一生
ウキンドの地圖へ戦果の目がた。 鯛好坊
新戦場孫に教ふる地圖の上 茶目坊
物語義手も忘れた傷痕章 井 蛙
傷痕章再起誓つてハンマ振り 凡 平
傷痕章手紙の人が花と来る 井 蛙
傷痕章美談の妻に手をとられ 同
上官も席を譲つた傷痕章 鯛好坊
切符制有難くある決戦下 游 記
監視哨聞へ膝く暇もなし 百多朗
川 三池染料支部句會(大牟田)
四月廿四日 於早稲講堂 蝶人報
世渡りの象は基盤の上に乗り 平 人
サーカスの人氣は象が集めて居 一 葉
蛇の夢余も拾へるそでなく 藤 樓
蛸給父 節子と知らず突き當り 水
節子窓閉めて床屋の公休日 蝶 人
燈管へ氣になる二階の節子窓 抱 逸
魚釣が柳を削り飯にする 平 人
座布団で防空帽を間に合せ 市 九
輪送船からの砂糖の味と知る 蝶 人
輪送船手柄譲りの座談會 蝶 人

登脚絆 歩調とりたい氣で 用かけ
七十を 元氣に見せる 登脚絆
登脚絆 足投げ 出して手に 巻かせ
登脚絆 まさしく 忘れもの とらせ
登脚絆 巻いて 貰つた 顔も せず
順服の用に 廊下 が 長すぎる
モンペのおいと 並べて 拭く 廊下
産院の 廊下 おしめの 紐を 張り
廊下にて 絶望で 聞かされる
廊下 までは み 出て 委員 一服し
區役所の 廊下は 待たず 出て 出来
寄宿舎の 廊下は 古着屋 ほど 掛り
待つ あるの 備へ 廊下 に 砂袋
内縁が 暫し 待つて 廊下 たり
大臣に 會ふと 云ふは 廊下 たり
洋定は 血 數減つた だけの こと
額血に 巴里の 今昔 語り 合ひ
ビフテキの 皿まで 切つた 音を立て
瀬戸人形 皿ばかりの 鏡着せ
初なすび 入れて 隣の 皿返し
皿一枚 舊夢へ 派手な 音で 割れ
らくやきの 皿を ドイツへ 持歸り
灰皿を 途中で 代へる 長談議
相傳の 皿に 家柄に ははせる
叮嚀に 皿を しまへば お菊めき
皿割つた 後の しじまに 女中居る
柿一つ 青磁の 皿を 引きたんせ
灰皿ヘジュンと 云はせて 腰を 上げ
落すかと 見れば 文へる 皿廻し
一皿と 云ふ 洋食に 氣が 迷ひ
お刺身に 河豚は お皿の 輪を 浮べ
一皿の 壯行會の 意氣 高し
皿小鉢 男が 洗ふ 不仕合
皿割つた 音を 奥さん 寢間できき
還暦の ひげの 白さを見 直され
兄弟の 氣質が 違ふ 慰問文
モンペの やつぱり 編へ立つの

殘燈 眞上の 月は 無駄に 涙へ
難談へ 憶氣でも よい 歳となり
皇軍の 強さ 二十で 死生 觀
散り 際も 亦華々し 親櫻
初孫を見たさの 上京とも 云へず
五月一日
松坂俱樂部川柳會(大阪)
隣の人 今度は ほんとに 簾簾買ふ
出まかせの 蟬が 運つた 淋しい日
スターなど 呼ばれ 多少の デマも
心境の 變化で してと 笑つて 居
蟬云はぬ 人で 未だに 難役夫
大丈夫と 云つて 軍醫の 目がうるみ
蟬云はぬ 兄にお 母さん 赤くなり
停年へすしりと 蟬がくつれ 落ち
蟬云はぬ 女となつて 臺所
瀟湘の 大きな 蟬へ 寄つて 来る
おしつこは 出ないと 蟬をつき 初め
體溫 計の 數字を 云ひ 放ち
轉業の 話 三男 ひざで 聞き
兄弟喧嘩 三男坊には 祖母つき
三男の 學費を 兄は 背負はれ
三男の 教科書 昔んな 假名が つき
南方へ 北へ 三男有 難し
三男の 仕業 父兄が 呼び 出され
海軍も いいなと 三男 迷つて
三男は 航空兵と 遺書に 有り
三男が 戻つて 來ない 夕御飯
三男の 嫁は 綺麗なのを 探し
三男に 望みを かけて 父は 老ひ
三男の名は 氣象なく 決められる
五月十六日
夕立が あかり ルンペン 暖をとり
國策と 威張れる 一つ 薄着なり
深水の 輪を 思は せる 薄着なり
薄着して 轉ぶ 芝生の 又たのし
強い子に 成れと 薄着のくせも つけ

結さして 薄着の 女無口 なり
薄着した 女中や つけばり 汗をかき
お彼岸へ 母は 薄着に なり 切れず
社長だけに 首巻 許す 嚴練日
寄せ書の その 惡筆が 親し まれ
時の人 その 惡筆も 額となる
惡筆 がやつぱり 筆の小言 云ひ
署名では 惡筆など 思はれず
筆耕の 惡筆に 枯れを見せ
名前だけ 書いて 惡筆 タイプにし
御面談の上でと 惡筆 むすんで 居
絶筆となれ 惡筆のため には はず
惡筆の 立てば 中々しや べるなり
惡筆で なければ 重役秘書 だろう
五月六日
有恒川柳會(大阪)
登脚絆 さあ 來いといふ 妻なり
ゲートルに ビルの 護りの いや 堅く
登脚絆 小僧 返事の 口調 變へ
登脚絆で 歩いて 來たは 漫談師
登脚絆 解かず 赤ん坊抱か される
貨物車の 音を 今夜も 聞いて 寝る
神木も 船へ 船へと 伐り 出され
地響を 聞いて 頼母し 夜の 貨車
芋のやうに 輪送されてる 春の人
エンヂンは 供出米を 集め 行く
この村に がある 田は 廣し
四月十五日
大阪警察病院川柳會(大阪)
二階でも 水槽 置と 坂つて 居
轉業は 二階も 貸すと 肚を きめ
新世帯先づ 二階でも さが させる
二階への 聲は 願 中口にして
二階から 二階を 呼んで 隣組
二階から 往來を みる 病上り
映畫では 二階の 夫婦 主役です

今日も ああ 二階の 窓が開く 頃だ
二階から 目撃されど 貯めて 置け
親爺には 二階世帯を 見せよ なし
二階には 居れど 賃券引き 受ける
二階 皆 ヒツツリ 閑の 増税日
二階 迄 連れて 上らぬ 堅さなり
二階の方へ 餅が 照いて 羨まれ
天引も 住友さんなら 羨からう
天引がかくも あるかと 月給日
天引を しても しても 食へ チョコ
天引も せず 親方の 出来て みる
呑み代を 天引されて も めてを なる
薄笑ひ どの シーンを 浮べて か
モナリザの 笑みは 無言で 妖殺し
胃袋の 強さ トーモロコシを 食べ
羨しく 機を 聞いて やれて つけ
讀む 時は なる程と 知る 四書 五經
四月十六日
大阪逓信病院川柳會(大阪)
割前が 安いと 云ふ 程 飲んで 居り
女親子に 關しては 度胸 見せ
割前に 領收書まで 見せられる
泥濘に 度胸を 据えて 意見をし
割切れぬ 勘定 幹部 拂はされ
捨身だと 云ふ 度胸には 厭された
會長の 寄附で 割前 安く つき
割前の 妻になつとく 出来ぬもの
割前に するを 淋しく 下戸 拂ひ
刺身の 厚さ 割前を ふと思ふ
割前に コーヒを すりうたが られ
割前の 外に 別口まで とられ
度胸 小さく 世の すわい にならぬ
洗面器 間温めと 云ふ 湯氣を 上げ
たたもふ 様に 割前 包まれる
安っぽい 度胸が 喧嘩 賣つて 出る
メス 執れば 度胸は 要らぬ 理詰め
よく 揺れる 洗面器で すセルロイド

洗面のたんと並べた金魚賣り
洗面器目高を入れて叱られる
洗面器ちつと眺めた船の搖れ
洗面器冷やす永が運ばれる
定期券歸に妻子の待つ迎へ

市電川柳會（大阪）

定期券ハツキリ 見せる律儀者
定期券 注意されてる衣更へ
便ひなら行きますと云ふ定期券
定期券 忘れて金を出し惜しみ
玄關に訪れられし部隊長
玄關に無人と見せぬ下駄を置き
玄關に自慢の菊を並べたり
玄の出入が笑ふ賑かさ
表彰狀ズバリと華ぶ奥座敷
表彰の名を校長が強く呼び
表彰に折目正しい作業服
表彰をされたモンベが目立つて居

艸生會川柳會（大阪）

三月二十七日 於花連亭

漸くに髪すうなりて任課長
黒髪をあたら縮らせあたら切り
竹トンボすました婦人の髪に落ち
ちつと見れば附屬色が違ふなり
タイプライター桃開で打つ松の内
髪につひ手間とりまして遅れて來
新妻に電髪だけは禁じたり
節分に思ひをかけて結んだ髪
髪はめた人へ袂のひるがへる
脚病を髪と握とかものがたり
後れ毛をなづいた風かほの匂ふ
おかっぱは死の直前の母とあり
銀髪へ七十年を振り返り
髪かたち 老父に似連ふ歳となり
髪なんぞ構つて居れぬ麥の伸び

同 翠芳報
同 翠芳
同 綠雨
同 青雲
同 撫筆
同 美奈子
同 秀甫
同 湯泉
同 山人
同 香山
同 綠雨
同 是牛報
同 多加史
同 隔山
同 同
同 同
同 同
同 同
同 是牛
同 同
同 同
同 同

[illegible]

朴想
 浩三
 陽炎
 思惑
 義朗
 默電
 帆休
 一笑
 大祐
 梅香
 秋子報
 時代
 ひさみ
 ゆかり
 千代
 キクノ
 まゆみ
 萬籟子
 ひさみ
 秋子
 萬籟子
 秋子
 花子
 萬籟子
 ゆかり
 花子
 和子
 同

そよ風に一輪落ちる酒の味
 蔭膳も毎日變る母の愛
 せまり来る日へ参考書厚く見え
 父征くと知らず背の子旗を振り
 増産へ今日も希望の朝が明け
 お化粧も忘れて留守を強く生き
 この花を九段から見ると二人
 増産の慰安に今日は花の庭
 盤若湯なそとお寺は別の名で
 猫の子を頼んでおいて鈴を買ひ

四月二十三日
 雉川 あざみ婦人句會

夕立が來るに雲がさはぐなり
 地下鐵を出た鼻先へ雨が落ち
 出迎へが並んで春の雨に濡れ
 日の丸が上手に出來た男の子
 はめられた子のお便ひの早いこ
 道とへば子供辻までついて來る
 泣かされたことは言はない男の子

五月七日
 荒鷲へ聲をひそめた敵の基地
 荒鷲の兄に濟まない程に病み
 明け切らぬ基地を荒鷲護つ仕度
 隣組こゝもすぎ焼する匂ひ
 隣組とんからりとゆかぬなり
 拾ひ屋の希望子のこと孫のこと
 子に背なをよませて希望おとろへす
 すばらしい希望を抱いてゐる日記
 買ふ品のわかめまゝに順を待ち
 雨だれを見つめて暮れる公休日

二月十四日
 徐州川柳會（徐州）

廢品へ母思出のものばかり
 嶺巒でまたも眺める子の寫眞
 寫眞屋が歸ると名所日が暮れる
 官を撮す五長は堅くなり

於文化協會事務所
 文花
 勝榮
 寛延
 荒城

寫眞屋に泣くく子へ懸な顔をみせ
寫眞屋が、頭下けるとみんな散り
三月廿一日
記念碑が道の邪魔する支那の街
自爆機も敵も呑み込み元の洋
興亡に記念碑建てたり壊したり
駐屯のもう記念碑を建てはじめ
記念碑を目印にする健歩會
春風の柳並木に驢馬を驅り
車の獲物見付けた急降下
鳴人
文花
ひろし
供海
汝堂
雨町
東亞
神峯
召公

非特異性全免疫元

本劑は、非特異免疫學說に準據して、高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。

(道廳保健課)

(適應症拔除)

（特長）

濃縮、各種肺炎、肋膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、葡萄膜炎、其他各科、急性、慢性、炭菌性、傳染性、敗血症、並に化膿性諸疾患に對し、嚴況に涉り、著効を奏す。

注射無痛、副作用絕無、用法簡單、奏效迅速、價格至廉。

(包 裝)

二CC 二管入	二CC 二管入
二CC 二管入	二CC 二管入
一CC 一管入	一CC 一管入

發賣元 株式會社 黑田藥品商會

大阪・東京

三

...



卷之四

...

セ・ミ・ノ・ハ・タ

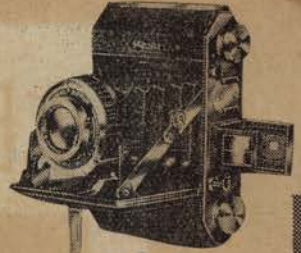
代表的國產カメラ

プロニー
16枚撮り

Ⅱ型F4.5付
¥ 117.00

F3.5付
¥ 141.00

距離計
¥ 21.00



(カタログ呈)
要郵券十銭

浅沼商會大阪支店

大 阪 市 南 區 順 慶 町 四 丁 目
電話 船場905・1905・1396・5095番

ガラス壺代用

紙 容 器



大阪市阿部野區晴明通一丁目四〇番地

二葉屋商店

金屬代用紙罐
紙 コ ッ プ
丸形・角形・小判形・
組立式各種・藥品・食
料品・菓子等の容器と
して最適

電話事務所用 天下茶屋(五八〇〇二番)
工 場 用 同 五八〇〇三番
五八〇〇四番

あ 産

め の た
に

片瀬醫學博士述

「安産のために」冊子呈上

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

楢林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査



フダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

麻生路郎著

新川柳評釋

定價〇・八〇
下〇・八〇

本筋の川柳で一粒運りの名句を蒐め、その一句一句に、不即
不離の評釋がしてある。

藤村誠一著・序文 麻生路郎・百田宗治

隨想集 詩人複眼

定價一・〇〇
下〇・〇〇

川柳眼で書かれた隨想集。その大半は高橋亞純のペンネーム
で川柳雜誌に發表されたもの。

戸田孤篷著・麻生路郎序

柳川 二千六百年史 定價〇・九〇
下〇・八〇

著者一人の創作、詠史川柳の尖端をゆく。

街の難音(實切)大 空(實切)人の一代(實切)
累卵の遊び(實切)

五二ノ五四代萬區吉住市阪大

洞 朽 不

番二九三〇三阪大 替 換

所行發

燃ゆ敬る神輝く本日

伊勢大神宮
榑原神宮
熱田神宮
参拜

急行終日頻発

関西急行鐵道